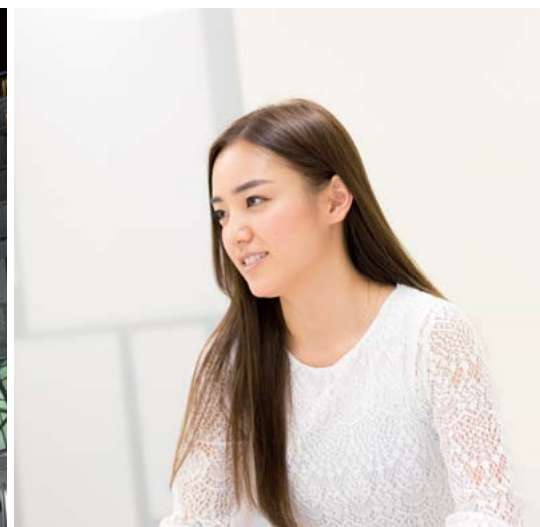


龍谷 Ryukoku



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

2014 No.77



進化させていくもの、 守り続けていくもの

昨年12月に和食がユネスコの無形文化遺産に登録された。日本の食文化が世界的な評価を受けたことで、改めて食を見直し、引き継いでいくという意識が芽生えている。なかでも京都は、長い歴史のなかで洗練されてきた京料理や和菓子など和食の粋が集まる街だ。家庭料理でも旬の素材を用いたおばんざいがあり、そんな京都ならではの文化を今後どのようにとらえ、活かしていくべきなのか。このテーマは、農学部の開設を2015年に控え、ローカルとグローバル両方向からの食の教育をおこなう本学にとっても重要なテーマである。今回の巻頭対談は、誰もが知る八ッ橋の老舗「聖護院八ッ橋総本店」の若きリーダーであり、京文化の発信にも努められている鈴鹿可奈子さんをお招きし、「料亭「瓢亭」の京都ならではの趣のある空間でお話しを伺った。

聖護院八ッ橋総本店
専務取締役

鈴鹿可奈子

龍谷大学学長

赤松徹眞

1982年京都市生まれ。聖護院八ッ橋総本店の一人娘として育つ。京都大学経済学部在学中にはアメリカ留学も経験。卒業後、帝国データバンクを経て2006年より聖護院八ッ橋総本店入社。現在は、専務取締役として商品企画や新ブランド創設を手がける。また、京都の文化人から環境を考える呼びかけをする「DO YOU KYOTO? ネットワーク」の呼びかけ人や京都市社会教育委員など、京都を中心に幅広く活躍。京都ブランドの向上に向けた歴史、文化、伝統などの情報発信に努められている。

1949年奈良県宇陀市生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。(文学修士)1984年龍谷大学文学部講師、1987年龍谷大学文学部助教授、1998年龍谷大学文学部教授、2005年龍谷大学学長、2007年龍谷大学文学部長、2011年4月学長に就任、現在に至る。専門は日本仏教史、真宗史、近代史。

CONTENTS

- 01 巻頭特集 学長対談
鈴鹿 可奈子 さん × 赤松 徹眞 学長
進化させていくもの、守り続けていくもの
- 04 5長 News シンポジウム報告
- 06 龍谷ミュージアム
- 08 「青春クローズアップ」
みらプロ 川上 友貴 さん、成島 幸穂 さん
「机に法律書を置いて、町へ出よう」
みらいのまちづくりを提言する法学部の学生達
- 10 グチコレ 藤原 邦洋 さん
「あなたのグチ、聞かせてください！」
街でじわじわ人気、学生僧侶達の愚痴聞き活動
- 12 イヤーブック作成委員会 堀後 達紀 さん、三浦 知佐子 さん
「この時代の空気感をも残したい」
学生主体でつくりあげるイヤーブックの制作風景
- 14 World,Unlimited
法学部 DUPLOCK, Christian さん
社会学部 CAMERON, Aubrey James さん、
英語で遊ぼう！留学生が小学校を訪問
学ぶより“楽しむ”ことで身につく国際感覚
- 16 Ryukoku Sports
ヨット部 瀬川 和正 さん
風を受けてめざせ、リオ・オリンピック
わずか6年で国内トップレベルの選手に成長！
- 18 バトン・チア SPIRITS
たった7人でめざした、黄金郷
バトントワーリングで、念願の全国大会に出場
- 20 News & Topics
- 26 RYUKOKU ACADEMIC
- 27 Ryukoku Extension Center
- 28 教員 NOW 農学部
いままでにない革新的な農学部創設へ向けて
ユニークな教員が続々と集結！
- 32 龍谷の至宝
『大宮学舎本館』
日本の近代化を今に伝える誇るべき歴史遺産
- 34 Education, Unlimited
スポーツサイエンスコース 長谷川 裕 教授、松永 敬子 准教授
「効果的な測定と分析」が子ども達の意識を変える
スポーツサイエンスコースの取り組み
- 36 第11回 青春俳句大賞
- 38 龍谷人
株式会社チェッカーサポート 代表取締役社長 伏見 啓史 さん
“レジ打ち”で日本を元気にする社長の、超ポジティブ・シンキング
- 40 タレント・モデル 夏美 さん
ミス龍大、CM ガールに抜擢！
運と度胸で突き進むタレントへの道
- 42 プロゴルファー 南出 仁寛 さん
驚異の日本記録、432ヤード！
マイペースな“日本一の飛ばし屋”の挑戦
- 44 「BOOKS」対談
平林 章仁 さん、水谷 千秋 さん
- 46 「BOOKS」新刊本を紹介
- 48 新学部長紹介
- 49 読者のひろば

時代とともに進化してきた八ッ橋

赤松：聖護院八ッ橋総本店は元禄2年創業なんです。その少し前に西本願寺の学寮として開かれたのが龍谷大学のはじまりです。今も八ッ橋といえは代表的な京菓子ですが、子どもの頃から本願寺に参詣したときに、よくお土産に買ってもらいました。噛めばニッキの味が広がっていくのが印象的ですね。

鈴鹿：私は子どもの頃からニッキの香りのする工場に出入りしながら育ちました。離乳食にも生八ッ橋を食べていたそうです(笑)。幼い頃から食べ続けても、不思議と飽きないんですよ。

赤松：粒餡が入った生八ッ橋「聖」が発売されたのは昭和42年ということですが、高度経済成長の真つ盛りです。誕生のきっかけは何だったのですか。

鈴鹿：昭和35年に、表千家の即中齋宗匠と懇意にさせていただいていた私の祖父が、茶会の際、宗匠から「生八ッ橋にこし餡を包んでみたらどうか」と提案いただいたのがきっかけです。「これは美味い！」ということになり、お酒が好きな祖父にちなんで「神酒餅」と名づけられました。その後、こし餡を粒餡に代えて商品化されたのが「聖」です。今では八ッ橋というところの方が有名になってしまいました。

赤松：新ブランドもプロデュースされているようですが。

鈴鹿：そんな母からも「英語は将来絶対に必要だから絶対留学しておいたほうがいいよ」と言われてまして。大学に入学してから春休みの度に語学留学には行っていたのですが、3年生のときにカリフォルニアのサンディエゴ大学へ留学して、1年間、授業とインターンシップを通して経営を学びました。

赤松：留学って語学や学びだけでなく、出会いや実体験がありますよね。

鈴鹿：私のコースには大学生だけでなく社会人で会社経営をしている方も来られていて、さまざまな国の会社経営について教えてもらい、とても勉強になりました。

留学先で気がついたのが、日本人って自分の国のことをあまり良く言わないということ。海外の人は自分の国をとても愛していて、今後どうしていくべきかを活発に議論しています。アメリカなら選挙の前には学生はその話を持ち切りです。でも日本ではちよつとそんな話をするだけで、極端に右よりじゃないかというように捉えられてしまいますよね。これではグローバル社会のなかで生き残っていけないんじゃないかと思えます。日本が好き、生まれ育ったまちが好きという気持ちを持ってこそ、グローバル社会のなかでの自分というものがしつかりするようになる気がします。私も留学から帰ってきて改めて京都についていいところだと思いましたが、海外で授業を受けると自分の意見を言わないと完全に置いていかれてしまいます。

赤松：グローバル社会というのはばらばらな

鈴鹿：3年前に八ッ橋・生八ッ橋の新しいお召し上がり方を提案するnikinikiというブランドを立ち上げました。そこでは色とりどりの生八ッ橋に、旬のフルーツや野菜のコンフィ、餡などを自由に組み合わせさせて楽しんでいただく「カレド・カネール」や、生八ッ橋で様々な形をあらわした「季節の生菓子」などを提供しています。どれも八ッ橋自体の素材は全く変えずにアプローチしているんです。これからは美味しいのは大前提で、どうアピールしていくかが大事になってきていると思います。ありがたいことにnikinikiはメディアでも取り上げていただきまして、非常に大きな反響をいただいております。

赤松：本質を大切にしながら、時代にあわせてアプローチし、進化しておられるんですね。その点は、伝統や建学の精神を守りながら、時代に向き合った教育をおこなう本学とも重なる部分があるような気がします。

鈴鹿：私には茶道をしていますが、お茶事では旬にあわせた食材、それにあわせた器、出す順番、部屋のしつらいなど様々なこだわりがあります。和食は昔から季節感や見せ方など五感を大切にしてきたお料理ですよ。和食との集まりではなく、きちつとした価値を設定したものを国内外に発信して、国境を越えた方々に賛同していただくような関係性を築いていくことが真のグローバル化です。これからは何に価値をおいているのかを鮮明にしながら行動していくことが大切です。あらかじめ設定された社会に同調するだけではグローバル社会のなかで付け加えられるものがないですよ。

鈴鹿：本当にそうですね。自分で考えて自分で動くことが大事。グローバルという用語は後から取り沙汰されますけれど、語学は後からでもついてきますからね。自分の伝えたいものを持つていないと意味がありません。

赤松：龍谷大学では、2015年4月に瀬田キャンパスにある国際文化学部を深草キャンパスへ移転するとともに、国際学部を改組し、国際文化学科に加えてグローバルスタディーズ学科を新設する予定です。TOEICの730点を卒業の条件にすることや、長期留学を必修化し、さらに留学先で正規科目を受講させるよう指導・サポートをしていくなど、かなり制御力を持ったプログラムを予定しているんです。

鈴鹿：ある程度制御力のあるプログラムは良いと思います。私もアメリカでは一日でそれぞれの授業につきテキスト100ページ読みこなして、最初の頃は遊びにも行けず、ひたすら部屋にこもって勉強していました。でも、私

和食は、食を大切にするという仏教的な考えを発信している



というのは、お客様をおもてなしするための総合芸術なんです。また日本ほど四季にあわせたお菓子がある国もないですよ。和菓子を食

べることで季節を感じることもできます。

赤松：和食といってもおぼんざいから懐石まで様々な種類がありますけれど、地産地消で新鮮な素材を使うことや手間ひまをかけること、盛り付けの美まで考えるという点ではいずれも共通しています。

鈴鹿：一方で和食って季節やお客様ごとに調理法や素材を柔軟に変えることができるお料理という面もあります。これは、グローバル化するのに適している文化ではないでしょうか。

こちらの瓢亭さんのご主人もいつも「和食の根幹はだしです」と仰っていますけれど、基本のだしの味がしつかりしているからこそ、融通を利かせたり冒険したりできるのだと思うのです。私どもも同じで、八ッ橋という確固た

も制御されていなかったら、そこまでできなかったかもしれません。

赤松：鈴鹿さんは京都市社会教育委員などにもされていますが、なにか大学教育へのご意見はありますか。

鈴鹿：それは難しい質問ですね(笑)。私自身の経験では、大学教育のなかでもっと考える場が欲しかったなと思います。ゼミではその機会に恵まれましたが、大教室での講義だけでは、テストの点数はうまく取れるようになっても社会に出てから考える力がつかないのではないのでしょうか。大学は人数が多いですから難しいですが、できるだけ少人数制で、自分で何か考えたり、自分の意見を発表する場があればあるほど良いのではないかと思います。私は、いま会社の採用面接も担当しておりますが、志望動機なんかは準備してきたことを

るものがあつてこそ、いろんな新しいことに挑戦できるのだと思っています。

赤松：日本のなかで和食というものは、命が健やかに成長していくためにとても大きな役割を果たしたと思います。同時にいただいた命をいかに開花させていくかという意味で食を大切にすることという仏教的な考えも発信しています。

来年瀬田キャンパスに開設する農学部のコンプラントは、人間の根源である、いのちを支える「食」と「農」を「食の循環」という観点から見つめ直すということなんです。

留学を通して改めて見えてきた日本

赤松：鈴鹿さんは大学在学中に留学経験があるそうですね。

鈴鹿：私の母もオーストラリアに留学経験があり、いまだにホストファミリーと交流してい

スラスラと話されるのに、「あなたはどう思いますか」と聞くとき答えられない方がときどきあります。仕事をやる上では自分で判断したり、決定することが多々ありますから意見がないと困ります。

赤松：私も日頃鈴鹿さんの仰ったことと共通するところは感じますね。学生にはある程度社会のマニユアル的なものを身につけると同時に、内面には、尖った、はみ出した面も意欲的に持つてほしいです。大学でもその手助けとなる教育をおこなっていかなくてはならないですね。

また、京都は歴史や宗教を学ぶ場所であり、文化作法を身につける場所でもあります。時代と向き合いながら、その時代にあわせて進化してきた街でもあります。お互いに、これからも世界のなかでの京都の価値を、改めて考えていかなければいけませんね。

和食ってグローバル化するのに適している文化ではないでしょうか





食と農の未来フォーラム 2013 —次代につなぐ食の心—

写真左より
高橋英一氏、柴田明夫氏、皆川芳嗣氏、赤松学長

2013年11月17日(日)、グランフロント大阪コングレコンベンションセンターにて、「食と農の未来フォーラム2013—次代につなぐ食の心—」(朝日新聞社共催)を開催した。本フォーラムへは、約1100名の参加申し込みがあり、抽選で選ばれた約400名の参加があった。

基調講演では、日本料理店「瓢亭」第14代当主の高橋英一氏から、「京の食文化—その魅力とこだわり」をテーマにご講演いただいた。講演の中で高橋氏は、「京野菜の復活やだしへのこだわり」などについて話された。

続いておこなわれたパネルディスカッションには、高橋氏に加えて、農林水産省事務次官の皆川芳嗣氏や資源・食糧問題研究所の柴

田明夫氏、赤松徹真学長が参加し、「循環する食と農業の新たな関係」をテーマに意見を交わした。

そのなかで皆川氏は、「食と農の距離をもう一度縮めることで、新しい動きが出てくる」と語り、柴田氏は、「日本の食は海外依存による(離れる農業)で、口に入るまでの時間が離れている。国内農業を見直し、(くつつく農業)をめざすべき」と指摘された。また、赤松学長は、「新たに開設する農学部の大概念は生産、流通、消費、再生の循環。理系だけでなく様々な分野が関わり、世界の食と農に貢献できる人間を育成したい」と述べるなど、日本の農業が進むべき方向について熱のこもった議論が展開された。



グローバルシンポジウム 『多文化共生』とグローバル社会に 求められる学びとは

写真左より
ロバート キャンベル氏、吉村宗一氏、池坊由紀氏、
ポーリン ケント国際文化学部長

2013年12月14日(土)、グランフロント大阪ナレッジシアターにて、「グローバルシンポジウム『多文化共生』とグローバル社会に求められる学びとは」(読売新聞大阪本社共催)を開催した。本シンポジウムへは、800名を超える参加申し込みがあり、抽選で選ばれた約350名の参加があった。

当日は、「あえて日本語の中で暮らすということ—グローバル社会と日本文化について—」と題して、日本文学研究者で東京大学大学院教授のロバート キャンベル氏による基調講演があった。続いて、キャンベル氏、日本貿易振興機構理事の吉村宗一氏、華道家元 池坊 次期家元の池坊由紀氏、ポーリン ケント本学国際文化学部長によるパネルディスカッションがおこなわれた。

基調講演でキャンベル氏は、「アメリカは来る者を拒まないが、

歩み寄ることもしない YOU より I を優先する競争社会。一方日本は他者に関心を持ち、半歩近づこうとする勇気と身構えを持っている。ある面、優れて国際的な国。これからさらに多様で豊かな社会を実現するには、I から YOU に歩み寄る半歩を、2歩・3歩進めるべく、社会と意識を変革していかなければいけない」と語られた。

またパネルディスカッションでは、「多文化共生」をキーワードに、これからのグローバル社会において必要な「学び」のあり方について、各パネリストから「日本だからできる多文化共生のあり方」や「グローバル社会に求められる学び、人材とは」といったそれぞれの体験談に基いた意見が出された。

新たな「龍谷大学像」を掲げ、教育・研究・社会貢献など、様々な分野で第5次長期計画(5長)を進めています。



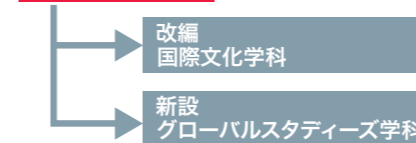
2015年「国際学部」開設予定 深草キャンパスが多文化共生キャンパスに



第5次長期計画の重要課題であった「国際文化学部のキャンパス移転計画」は、より具体的な展開をみせる。1996年創設の「国際文化学部」が長年にわたって蓄積してきた教育・研究資源をさらに深化・発展させるため、2015年4月に国際都市・京都へ移転し、「国際学部」として生まれ変わる。その舞台となるのは、“多文化共生”をテーマにリニューアルする京都・深草キャンパス。新学部では単に外国語を話すスキルだけではなく、その背景にある異文化を理解し、様々な経験を積み、好奇心や共感力を育むことを目的としている。国や文化の壁を越えて、積極的に自分の考えを他者にわかりやすく伝える力を身に付けることが、ここで学ぶ学生達の目標となる。

2015年4月 深草キャンパス(京都)

国際学部 教員の4割が外国籍



国際文化学科

- 多様な言語・文化と教養を学ぶことができる教育システム
- 「京都」での多様な文化の学び
- 学科全員が必修の実践科目「国際文化実践プログラム」を導入

国際文化学科では、「世界を学び、日本を知る」という理念に基づき、世界の多様な言語文化を学びながら、それぞれの国や地域の社会問題を自分自身と結びつけて理解することをめざす。文化間の壁を乗り越えるのに必要な言語の習得にも力を入れるため、11カ国の外国語の授業を開講。英語教育を重視しつつも、アジア、ヨーロッパなどの各地域の言語とその文化について学ぶ。また、長期・短期の留学プログラムを設定し、海外留学やフィールドワークを奨励・支援していく。

多言語+教養を学べる教育システム

現状履修できる言語

英語	中国語	フランス語	コリア語
----	-----	-------	------

+

2年次より履修できる言語

ロシア語	ポルトガル語	トルコ語	アラビア語
ポルトガル語	スペイン語	ドイツ語	

→2年次から以下3コースに分かれて専門科目を履修

- (1) 世界と日本コース
- (2) 多文化共生コース
- (3) 芸術・メディアコース

グローバルスタディーズ学科

- 全ての学期に英語による授業を配置
- 長期留学を必修とした留学プログラム
- 卒業時の英語運用能力の質保証 (TOEIC®730点等取得の卒業要件化)

グローバルスタディーズ学科では、英語を用いたコミュニケーション能力を磨き、国際舞台で活躍するのに必要な知識を養う。1年生から4年生までの全ての学期に英語による授業が配置され、必修である長期留学プログラムではきめ細かいサポートのもと、現地学生を対象に開講されている学士課程科目を受講する。なお、留学先の授業料は大学が全額負担する。これらの取り組みを通じて、卒業時にはTOEIC®830点以上(卒業要件730点以上)の取得をめざす。

学生の英語運用能力の質を保証

必修外国語(英語)科目における各年次の目標スコア

各年次における 英語運用能力 到達目標(スコア)	1年次修了時	2年次修了時 (及び卒業要件)	3年次修了時 (留学修了時)	卒業時
TOEIC®	685~	730~	800~	830~
TOEFL®(PBT)	525~	550~	570~	580~
TOEFL®(iBT)	70~	80~	88~	93~
IELTS™	5.5	6.0	6.5	6.5

※英語科目の卒業要件

新卒採用時に英語能力を考慮する多数の企業が「評価できる TOEIC®の点数」としている 730、または、TOEFL® (550-PBT、80-IBT)、IELTS™ 6.0 のいずれかを取得すること。

龍谷ミュージアム春季特別展

チベットの仏教世界 もうひとつの大谷探検隊

4月19日(土)~6月8日(日)

主催：龍谷大学 龍谷ミュージアム、産経新聞社、京都新聞



青木文教 (1886-1956)



多田等観 (1890-1967)

数奇な運命で「秘密の国」にたぐり寄せられた二人の青年 日本とチベットを結んだ、もうひとつの大谷探検隊とは

「秘密の国」と呼ばれ、20世紀初めまで日本ではその実態のほとんどが知られていなかったチベット。現在のように交通機関が発達していなかった明治末に、危険を冒してこの秘境へと旅立った若者が二人いる。彼らの名前は青木文教（1886-1956）と多田等観（1890-1967）。いずれも西本願寺の若い学僧である。二人によるチベット調査は、かの大谷探検隊のいわば別派であり、中央アジアでの偉大な業績に劣らぬ貴重な研究成果と興味深いエピソードを多数有しているながらも、その功績は世間ではほとんど知られていない。そこで龍谷ミュージアムでは、この二人の青年の軌跡に焦点をあてながら、もうひとつの大谷探検隊の業績をひも解くと同時に、魅惑のチベット仏教美術を紹介する特別展を開催する。展覧会の見どころを学芸員の岩田朋子さんに伺った。



龍谷ミュージアム 講師(学芸員)
いわた ともこ
岩田 朋子



釈尊絵伝 本尊《花巻市博物館》

見どころ1
チベットと友情を結んだ、青木と多田

今回の展示はぜひ、二人の青年に自分を重ね合わせて、チベットを旅するように展覧会をみていただきたい。まずは主役の二人を紹介しよう。青木文教は自ら望んでチベットへ行った。チベット仏教や文化に関心のあつた青木は、1912年に大谷光瑞の命でチベットの首都ラサスに入ると、ダライ・ラマ13世の生家に寄宿しながら、ラサの貴族や市民と広く交流。仏教の經典だけでなく、チベットの歴史や文化、語学、人々の生活などを幅広く調査した。几帳面な性格の青木は、日本を旅立つてから帰国するまでの3年の間、日々



ポタラ宮《撮影：青木文教『亜細亞大覽』1927年より 龍谷大学》

敷いていたチベット法王庁に、世界情勢を啓蒙するという貴重な役目も果たした。

一方、多田等観はダライ・ラマ13世に信頼され、チベットに留まった人だ。西本願寺にてチベット留学僧の日本語教師をしていた多田は、卓越した語学力でたちまちチベット語をマスターしてしまう。代わりに完璧な秋田弁を留学僧に仕込んでしまい教師を解任されるというエピソードもある。留学僧を送り届けるために向かったインドで、多田はダライ・ラマ13世に謁見する。そこでダライ・ラマは流暢なチベット語を話す日本人をひどく気に入り、チベット仏教の修行を受けるよう命じるのだ。その後、多田は実に21歳から32歳までの11年もの間、ラサにて修行生活を送ることになる。さらには經典の暗記と問答という厳しい試験を経て、最高学位であるゲンシェー（天僧正）を授かるまでになった。ちなみに、外国人で最高学位を得た人は後にも先にも多田だけである。多田の帰国の前日には、ダライ・ラマは多田と枕を並べて床につき、別れを惜しんで会話をしたという。そして門外不出であった「アルゲ大蔵経」を含む2万4千冊余ものチベット文献とそれを携えた80頭のロバを記念に与えられ、多田はチベットを後にする。まるで、映画のような実話である。

この20代そこそこの日本の青年達を突き動かしたのは「未知ののを見せよう」「なんでも学んでやろう」という情熱だ。複雑な国際情勢下でのチベットへの命がけの旅。二人は巡礼僧の姿に身をやつし、青木はネパール経由で高山病に耐えながら峠を越え、多田はインドからヒマラヤを裸足で越えるという過酷

な旅を経て、チベットへ辿り着いたという。そして未知の国で、慣れない文化に飛び込み、食欲に吸収しようとした。そんな彼らの姿は、グローバル化という言葉を持て余す現代の我々に、何か大切なことを訴えているような気がしてならない。展示では彼らのもたらした資料をはじめ、実際に使用していた生活用具なども紹介し、彼らの眼に映ったチベットを紹介する。

見どころ2

関西初公開！
ダライ・ラマから贈られたチベットの仏伝図

今回の展覧会では様々なチベット仏教美術が展示されるが、そのなかでも一番の目玉は、多田等観がもたらした「釈尊絵伝」25幅である。チベットから帰国する際、ダライ・ラマに記念の下賜品を問われた多田は、この「釈尊絵伝」を希望したが、あまりに貴重な物であるがゆえにその希望は叶わなかったという。しかし、多田が帰国して約10年後にこの絵伝は日本に届けられる。多田との友情の証として、ダライ・ラマ13世は遺言で、この絵伝を多田に譲ったのだ。

そんなあたたかいエピソードを持つこの絵伝は、歴代のダライ・ラマに伝えられてきたもので、非常に貴重なものである。

釈尊の生涯（仏伝）はアジア全域に語り継がれ、様々なかたちで表現されてきたが、今回展示される「釈尊絵伝」は誕生から入滅、そしてその後まで120もの場面が描かれており、ここまで緻細に描かれたものは非常に

珍しい。また、17世紀に描かれたものにしては保存状態が良く、豊かな色彩を鑑賞できる点も素晴らしい。ぜひ肉眼でその鮮やかな色合いを楽しんでいただきたい。展覧会ではこの25幅を二堂に展示。まるでチベット寺院のなかを歩くような感覚で鑑賞することができる。また、絵伝からいくつかの場面を取り出して絵解きをおこなうほか、ガンダラの仏伝浮彫との表現の異なりも踏まえながら、チベットならではの表現を紹介する。

そのほかにも国内のチベット仏教美術のコレクションから、貴重な仏像や仏画、曼荼羅などを展示。インド世界からの影響を受けながらチベット独自の仏教が展開していく様相を、様々な仏教美術の作例を通して概観することができる。

「チベット仏教美術」というと密教独特の雰囲気やイメージされる方も多いようですが、そんな方にこそ、ぜひ伝統的なチベット仏教美術の世界をご覧ください」と学芸員の岩田さんは語る。

青木文教、多田等観、そしてダライ・ラマ13世。遠く離れた日本とチベットという二つの国を結んだ、三人の不思議な縁に思いを馳せながら、チベット仏教美術の世界をさらに深く堪能していただきたい。

特別講演

- 4月27日(日) チベット仏教美術の魅力
- 5月11日(日) 近代日本とチベット
―青木文教の生涯を通じて―
- 5月18日(日) 西域・宮澤賢治と多田等観
- 5月25日(日) チベットの音楽

「机に法律書を置いて、町へ出る」
みらいのまちづくりを提言する法学部の学生達



みらいの環境を支える龍谷プロジェクト

かわ かみ ゆ き

前代表 **川上 友貴さん**

法学部4年生 大阪府立三島高等学校出身

地元の方々が参加した「まちゼミ「伏見講話」」で司会進行をする川上さん（深草町家キャンパスにて）



なる しま さち ほ
代表 **成島 幸穂さん**

法学部3年生 静岡県立掛川西高等学校出身

現在多くの市町村で、この景観法に基づいた景観まちづくりがスタートしている。「みらプロ」のメンバーは、そんな景観法に絡んだ訴訟が起きている地域を中心にフィールドワークをおこない、まちづくりの議論や提言をおこなってきた。この3年間で、現地調査やヒアリングをおこなった回数は40回以上。エリアも京阪神をはじめ、東京、神奈川、鳥取、広島、富山、高知、熊本、沖縄まで広範囲にわたる。

最初の現地調査では、「崖の上のポニョ」（宮崎駿監督・ジブリ映画）の舞台として参考にしたことで名高い、鞆の浦（広島県福山市）を訪れた。美しい景観が失われる危険性があるとして住民が起した「埋め立て架橋計画」の実態を知るために、現地でヒアリングを実施。原告団や地域住民の生の声を聞いた。実際に問題となっている場所を皆で歩いてみた。そのときに得た経験が、その後の「みらプロ」の基本姿勢を決定づける。「この調査から、法律の問題、制度の問題は紙面で勉強できても、本当の問題の所在や訴訟当事者の思い、被告行政との協力関係、そして地域をどのようなまちにしていきたいと考えているのか、といったことは、現地だからこそ学べるのではないかと思います。また問題となっている道路を訪れてみると、確かに狭い道路ですが、車同士が譲り合って通行しているのを見て、実際の地元の雰囲気を感じることができました」（川上さん）

学生からの本気の提言

これまでの、みらプロの活動としては、2010年9月に龍谷大学にて学生主催のシンポジウム「21世紀の景観とまちづくり in 京都」を開催。関西の6大学9団体の学生が景観まちづくりについて発表。市民、学生、専門家など約300人が

集まって、みらいの景観まちづくりについて議論をおこなった。そのまとめとして作成した「京都発・景観まちづくり学生提言」は国土交通省文化庁、東京都、滋賀県、京都市、奈良県、大阪府、広島県などへ提出し、新聞にも大きく取り上げられた。また2011年に現地調査をおこなった鳥取県八頭町では、地域資源を活かしたまちづくり企画案を作成し、行政に提出。実際に予算がつき実現に向けて動き出しているという。

「私達は現地調査をする際、そのエリアの県庁や役所にヒアリングに行きますが、事前にその市町村の景観条例、景観計画などを全て読み込み、しっかりと勉強してから質問状を作成します。役所の職員の方は日々業務に追われておられるので、学生が話を聞きたいと言ってもなかなか取り合ってはもらえません。私達がいかに真剣にそのまちのことを考えているかをわかってもらうため、事前準備を万全におこない本気度を見せるのです。難解な文書も多くて私達にとってはかなり大変な作業ですが、とても勉強になります」（成島さん）

学生だからこそ、地域に溶け込みやすい

そんな「みらプロ」のメンバーが現在取り組んでいるのは「深草SOSUI（疏水）物語」と名づけられたプロジェクトだ。日本近代遺産の一つであり、京都市が世界遺産に登録しようとして活動している琵琶湖疏水。この疏水は夷川発電所へ墨染発電所までは鴨川運河と呼ばれ、かつては生活用水や物流手段として活用され、水辺での暮らしが栄えていたはず。今では当時の生活の面影はほとんどなく、残っている資料も少ない。そこで鴨川運河を中心とした当時の暮らしを掘り起こし、地域への発信、その魅力を活かした地域憲章案（仮）の作成をめざす。「地域の方にお話を伺っていくなかで、かつては疏水を使っ

まちゼミ「伏見講話」の現場へ見学

「みらプロ」の独自性は、たいてい社会学や政策学の立場からアプローチされることの多い「まちづくり」に、「景観法」を軸に法的なアプローチをしているという点にある。景観法とは平成16年に国土交通省、環境省、農林水産省が制定した法律で、歴史や文化を含めたそのまちの個性を活かしながらよりよい環境を形成し、国民の生活と経済を発展させようというもの。

嫁入り道具を運んでいたとか、子どもの頃は泳いでいた、なんて記録に残っていない事実もわかってきました。そんな思い出を集めながら、この地域の魅力を住民の皆さんと一緒に再確認することで、住む人が誇りを持てる地域づくりをしていきたいと思っています」（成島さん）

疏水にアプローチするには、水権や所有権など複雑な問題が絡み合います。縦割りの行政では全て担当部署が異なり、必要な情報を集めて共有するのも「苦労」。だからこそ私達学生が横断的に情報を集めていくことに意義があると感じています。また地域に溶け込みやすく、地元の人からの情報が得やすいのも、深草キャンパスで学ぶ龍大生ならではの強みです」（川上さん）

高槻出身の川上さんは、「みらプロ」をはじめから、自分の地元を見る目も変わったという。

「超高層マンションが増えてきた地元を見て、商店街はどうなっているのか、大学は静かに勉強できる環境なのか、このまちの計画はうまくいっているのか、と批判的に見るようになりました。これからどんな職業に就くか、将来どこに住むかはまだわからないですが、これからも自分の住む地域のまちづくりには積極的に関わってみたいです」（川上さん）

戦後、私達は急速な発展と共に便利な生活を手に入れた反面、まちの歴史や文化、地域コミュニティといった精神的な豊かさをないがしろにしてしまった。結果、その多くが失われつつある。「みらプロ」メンバー達はそんな地域の「個性」や「景観」という大切な資源を見直すことで、本当に安心して暮らせる市民社会を自分達の手で構築する方法を模索している。教室を飛び出し、他大学の学生や地域の人々、専門家とボードレスに交流しながら自力で成長してゆく姿は、実に頼もしい。誰かがつくったまちに住むのではなく、自分の住むまちは自分達の手で、誇りを持てる魅力的な場所にしていこう。そんな意欲に燃える彼らの姿の先に、明るいみらいが見える。

「あなたのグチ、聞かせてください！」 街でじわじわ人気、学生僧侶達の愚痴聞き活動

しんしんと骨に染み入るような、底冷えのする12月。家路を急ぐ人や観光客で溢れかえる夕暮れの京都タワー前に、学生達がプラカードを持って座り込んでいる。カードに書かれた文字は「あなたのグチが聞きたいです」。彼らはグチコレという活動をおこなうグチコレクター達だ。グチコレとはグチコレクションの略で、街ゆく人々の愚痴を無料で聞くといいもの。一風変わった試みとして、様々なメディアでも注目されており、我々取材班が訪れた日にはNHKのカメラも彼らの姿を追っていた。

普通ならグチグチと他人の愚痴を聞かされるのは勘弁してほしいもの。なぜ、彼らはあえてそんな愚痴を聞き始めたのだろうか。代表の藤原邦洋さんに取材した。

愚痴るはポジティブな行動

「悩み多き現代人には愚痴をこぼす場所が必要なのではないだろうか、ならば路上で吐き出してもらおう。そんなアイデアからグチコレは始まりました。悪口や弱音と同じくネガティブなイメージを持たれがちな愚痴ですが、僕は愚痴は本音と向き合うポジティブなことだと捉えて、気軽に愚痴を言える社会をつくりたいと思っています」

そう語る藤原さんは、寺の次男坊。幼い頃から袈裟姿の父親に憧れ、僧侶になる夢を描いてきた。実家の寺は長兄が継ぐことになっているが、藤原さんも何らかの形で僧侶として生きていくことを決めている。めざす僧侶像は、御門徒さんの心に寄り添える僧侶だ。そんな藤原さんにとってグチコレは、様々な悩みを聞いたり共感する力を高めるための、格好の訓練の場でもある。グチコレは藤原さんと同じく、将来僧侶をめざす5名の学生達を中心となって始まった。今ではメンバーは20名に

増え、京都女子大学など他大学の学生も参加しているそうだ。

愚痴は世相を表す研究資料にも

グチコレは2012年11月よりスタートし、すでに活動回数は70回を超える。活動場所は主に京都タワー前で、夕方から夜にかけて週1回程度のペースで実施している。また、出張グチコレとして、京都市が運営する青少年活動センターや市内の飲食店、様々なイベントでも人々の愚痴を聞いているそうだ。場所によって愚痴をこぼしにくる人の年齢層も、小学生からお年寄りまで幅広い。また路上でも多いときは約2時間の活動中に30人も人が来られるそうで、なかにはリピーターもいるとか。藤原さん達も当初は予想外の反響に驚いたという。皆さん、一体どんな愚痴をこぼしていかれるのだろうか。

「10代の方は宿題が多すぎるとか、友達とうまくいかないなんて愚痴が多いですね。面白かったのは突然買ってもない布団が届いたという女性。冬は寒すぎるという愚痴も多いです(笑)。末っ子は幼い頃の写真が少ないという愚痴には、次男の僕も大いに共感するところがあつて盛り上がりました。孫のケンカでどちらの肩を持つか悩ましい」なんて80代の男性もそんなわりとライトな愚痴があれば、1週間前に息子さんを亡くしたという方や、お父さんが被災地で働いていて心配という娘さんなど深刻な愚痴もあります。内容によって相づちを打って盛り上げることもあれば、沈黙を大事にしたがらただただ聞くこともあります。たくさんの愚痴を聞くなかで、僕らの聞く力も少しは上達してきたかもしれません」

グチコレで集められた愚痴たちは、全て、本願寺が運営する



グチコレ代表
ふじ はら くに ひろ
藤原 邦洋 さん
大学院実践真宗学研究科
龍谷大学付属平安高校出身

「他力本願ネット」(<http://anikongwanet>)で公開している。これは他人の愚痴をみて共感するだけでも、少し気持ちが楽になることもあるのでは、との考えからだ。もちろん個人情報も特定できないよう配慮されている。また、藤原さん達は集めた愚痴を年代・性別・内容別に分類し、全てデータ化しているという。これは、愚痴の経年変化を知る資料として面白いものになるかもしれない。藤原さんは、このデータを修士論文にも活用しようと考えているそうだ。

愚痴を聞くための3条件

グチコレでは、気持ちよく愚痴ってもらうための三つのルールがあると語る。1. 批判や意見をしないこと、2. 聞いた愚痴を関わりのある人に言わないこと、3. 共感的な態度で聞くことである。

このルールで聞いていると、「愚痴なんてないよ」と言っていた方でも、世間話をしているうちにどんどん愚痴が出てくるそうだ。

「愚痴つて家族や同僚にはなかなか言えなかったり、言うところ

ケンカになってしまったりしますよね。他人だからこそ、気兼ねなく言いたいことを心おきなく言えるのです。でも他人なら誰でもいいかという、そうでもない。やはりきちんと聞いてくれて、信頼できそうな人に言いたいですよね。ですから、僕は身だしなみをきちんとしたり、はじめに自分達の素性を明らかにするようにしています。僕達が龍谷大学の学生であり、浄土真宗本願寺派の僧侶であるということも、安心してもらえる大きな要素になっています」

愚痴を言ってくれば言ってくれるほど、心を開いてもらえたような気がして嬉しく、そんな方が笑顔で「ありがと」「また来ます」と帰っていく姿を見るとこの活動をしていて良かったと思える、と藤原さん。多くの人にとって僧侶とは葬式の場ではじめて会う存在だが、藤原さんはそんな現代の僧侶の在り方をもっと身近なものに変えていきたいという。

「人じゃない」と伝えたい

そもそも、「愚痴」とは仏教用語の一つ。「愚痴」の心は、迷いの心の根源とされ、数ある煩惱のなかでも人間を最も苦しめる毒薬として「怒り」「貪り」とともに「三毒」と呼ばれる。わざわざ戒めなくてはならないほど、「愚痴」は人間にとって失くすことが難しく、心に占める割合も大きなものなのだろう。風邪は万病の元と言うように、たかが愚痴でもたまり続ければ心を蝕む。

「抱えた問題を誰にも話すことができない、そんな方がたくさんいることは大きな社会問題です。抱えている孤独は人それぞれで、一様に解決できるものではありません。僕らは未熟ですが、愚痴に耳を傾け、少しでも寄り添うことで、人々の心に決して一人ではないということを伝えたいと思っています」

グチコレの活動は今後も継続していくそうだ。どうもイライラがたまっているという方、心の大掃除をしに一度グチコレを訪れてみてはいかが。



「この時代の空気感をも残したい」 学生主体でつくりあげるイヤーブックの制作風景



イヤーブック作成委員会・委員長

ほりご たつき

堀後 達紀さん

国際文化学部3年生 三重県立四日市南高等学校出身

成人の集いで取材撮影する堀後さん

龍谷大学のイヤーブック（卒業アルバム）が、学生達の主導によって制作されていることをご存じだろうか。イヤーブック作成委員会では、写真撮影からデザイン、原稿執筆まで幅広く担当し、日々編集作業に励んでいる。今年39年目を迎えたイヤーブック作成委員会の堀後達紀さんと三浦知佐子さんに、日頃の活動について伺った。

学生生活をくまなく記録する

「二年中、撮影スケジュールがびっしり。卒業式や龍谷祭などの行事だけではなく、キャンパスでの学生生活もしっかり記録するために毎日駆け回っています」

イヤーブック作成委員長であり、カメラ班の堀後達紀さんは、多忙な撮影の日々を楽しそうに語る。

現在、龍谷大学イヤーブック作成委員会は総勢47名。メンバーはカメラ班と編集班に分かれて作業を担当し、毎年8月頃に発行されるイヤーブック制作に励んでいる。

3万円が一般的な価格帯であることを考えれば、良心的な価格設定だ。

「ずっとお付き合いいただいている印刷会社さんには『これまで学生ががんばってつくる卒業アルバムも珍しいね』と応援していただき、そのご厚意で実現している価格です。より多くの方々に手にとっていただくため、可能な限り価格を据え置きたいと考えています」（堀後さん）

「それでも『高いよね』ってよく言われるんですよ（笑）。卒業生のほぼ全員が掲載されていてこの価格はお得だと思うのですが……。まだまだイヤーブックの内容やその良さが知られていないということなのでしょうね」（三浦さん）

イヤーブックの存在そのものを知らない学生もまだ多く、今後は周知活動にも力を入れていく予定だ。

「作成委員会が撮影した写真のほかに、学生の皆さんからの持ち込み写真を掲載するページもあります。プライベートな思いを残すことができる媒体としても活用してもらえればうれいですね」（三浦さん）

写真が特別だった時代には、イヤーブックだけが学生時代の思い出を残してくれた。しかし、誰もがデジタルカメラを持ち、思い出を瞬時にインターネットで共有できる今は、ずっとしりと重いイヤーブックを購入するために特別な動機が必要だ。堀後さん達は、そんな『イヤーブックの存在意義』を考え、必死に答えを見つけようとしている。

「イヤーブックに残るのは個人の思い出だけではありません。私達は、この時代の龍谷大学の空気感をも切り取るつもりで制作しています。卒業して数十年が経っても、イヤーブックを眺めるとすぐに学生時代の気持ちに反れるような内容をめざしているんです」（堀後さん）

現在、イヤーブック作成委員会のメンバーは、卒業式直後の入稿作業と新年度スタートの準備で大忙しの毎日を送っている。キャンパスで黄色いジャンパーを着て撮影に励む堀後さん達の姿を目にする日も多くなるだろう。

みうら ちさこ
三浦 知佐子さん

社会学部3年生 滋賀県立守山北高等学校出身

「カメラ班は行事のほかに個人写真やゼミの集合写真、サークル活動、学内スナップなどを撮影しています。撮影は3月の卒業式を撮り終えるまで続くので、イヤーブックには学生生活の4年間が全て詰まった内容になるんですよ」

昼休みや講義終了後に黄色いジャンパーを着てキャンパスを歩く、イヤーブック作成委員を目にしたことがある方も多いのではないだろうか。イヤーブックに掲載されている学生生活のスナップは、堀後さん達カメラ班のメンバーが撮りためた、膨大な枚数の写真からセレクトされたものだ。

編集班は主に各ページの構成案や背景デザインなどを担当。掲載する写真のセレクトや文章執筆などにも携わるといってもその役割は幅広い。編集班の三浦知佐子さんは「昨年とはひと味違うデザインを考えるのが楽しみでもあり、苦労するところ」と話す。

「卒業式は桜』『成人の集いは紅白』と毎年、各ページある程度決まったイメージはありますが、そのなかで自分らしいデザインをつくり上げていく楽しみがあります。でも、どんなに斬新なデザインができたと思っても、過去のアルバムを参考に見返すとやっぱり似たようなことを先輩達も考えているんですよ。イヤーブック作成委員会に入ってから、日頃から可愛い包装紙やフリーペーパーなどのデザインに注目するようにしました」

また、編集班は創立記念降誕会や龍谷祭のゲストにインタビューをおこない、その原稿執筆や編集作業なども担当する。三浦さんはこのインタビューがなによりも楽しみだという。

ときは感動しましたね。それまでパソコンのモニターで見ていたページが実際に印刷されて手元に届くなんて、信じられないような気持ちでした。有名人にインタビューをして、それを自分が文章にまとめるなんて貴重な経験ですよね」

伝統の重み

イヤーブックの制作にあたっては、これまでOB達が積み重ねてきた歴史から学ぶことも多いという堀後さん。

「作成委員会のBOXには、これまで先輩達が制作してきた1975年からのイヤーブックが全て保管されています。制作途中で悩んだり、迷うことがあれば昔のイヤーブックをめぐると先輩の苦労の跡に励まされますね」

BOXには、かつてOB達が使用していたフィルムカメラや手書きの原稿なども大切に保存されている。現在の作成委員会ではデジタルカメラやパソコンを駆使して制作がおこなわれているが、根底にある想いは同じだ。39年間の歴史のなかで積み重ねてきた伝統は今も息づいている。

イヤーブックの制作では写真、編集ともにその年度の創意が大きく反映されるが、この39年間ずっと変わらないものが二つだけある。

「39年間ずっと学生自身が学生目線で卒業アルバムを作成してきたこと」（堀後さん）

イヤーブックの存在意義

龍谷大学イヤーブックの価格は1万円。他大学では2〜

World, Unlimited

「多文化共生を展開する大学」を標榜する龍谷大学。2015年4月には国際文化学部が深草キャンパスへと移転し、「国際学部」として生まれ変わり、国際化へ向けた取り組みがますます加速する。高い志を持ったグローバル人材を育てるため、言語や文化の壁を越えて世界と連携する取り組みが現在、各学部で精力的におこなわれている。

DUPLOCK, Christian さん

法学部
オーストラリア マードック大学より交換留学



CAMERON, Aubrey James さん

社会学部
カナダ クワントレン・ポリテクニク大学より交換留学



どんな国の留学生にも尻込みしない子ども達

龍谷大学から歩いて10分ほど、伏見稲荷大社に隣接する稲荷小学校で、めずらしい「カルタ大会」がおこなわれていた。教室の床に散りばめられた札を囲んで輪になった子ども達は、息をのんで次の句が読み上げられるのを待っている。そこで読み上げられたのは「Did you buy a ticket?」。なんと英語だ。流暢なネイティブの発音で次々と札を読み上げていくのは、オーストラリア出身のクリスと DUPLOCK, Christian さんと、カナダ出身のキヤメロンと CAMERON, Aubrey James さん。

「Did you buy a ticket? ticket?」二度目はゆっくりと単語を繰り返す。はじめはキョトンとしていた子ども達が「チケット? チケット?」とつぶやきながら目を床に走らせる。ぱしん! チケットの図柄が描かれた札に5年生の女子が素早く手を伸ばして、誇らしげに微笑んだ。子ども達はみな外国語の勉強をしているなどという意識を持つこともなく、すんなりと英語版カルタに馴染み、純粋にゲームに夢中になっていた。

本学で学ぶ留学生とS.A.B.S.*に所属する日本人学生が、稲荷小学校の「国際理解クラブ」の活動に参加しはじめたのは昨年の夏から。本学留学生と小学生が国際交流する活動は初めての試みで、今後も広げていく予定だ。「国際理解クラブ」は4年生から6年生までの児童が所属し、週1回活動している。

英語で遊ぼう! 留学生が小学校を訪問 学ぶより“楽しむ”ことで身につく国際感覚



そのなかで留学生がクラブを訪れるのは月に2回ほどだ。クラブではまず、留学生が自己紹介を兼ねて自国の文化をクイズを交えたりしながら楽しく紹介したあと、かくれんぼやゴム跳びなど様々な国の子ども遊びをみんなで楽しむ。今まで来た留学生はスイス、韓国、中国、スペイン、イタリア、台湾、オーストラリア、カナダなど。毎回異なる国からの留学生が訪れるので、子ども達は様々な国の文化に親しむことができる。といっても基本的に留学生が児童と会話するときは日本語を用いている。ここでめざしているのは語学を学ぶことではなく、外国人と触れあい、親しむことで、国際感覚を養うことにあるからだ。今回もクリスが「オーストラリアについて何か知っている人?」と問いかけると、子ども達は積極的に挙手して「コアア」「カングルー」「オージービーフ」「鉄鉱石」「エアースロック」などと発言した。昨年のスタート以来すでに10数回も留学生に接している子ども達にとって、外国人は慣れたもの。特に尻込みすることもなく、自然に会話する姿が印象的だった。

机上では学べない感覚をお互いに学びあう場

6年生の児童に感想を聞いてみると「授業で習っているので、英語で言っていることはだいたいわかります。地図を見たり、言葉を感じるのが楽しい。言葉の音が日本語と違う感じがするのが面白い。もっと外国語の勉強をしたいです」と話してくれた。一方、

留学生達にとっても、小学生との触れあいは貴重な体験だ。

「日本にいる間にできるだけたくさんこのことを体験したいと思って参加しました。子ども達からは毎回たくさん質問がきます。そんなときにどうやって説明したらわかってもらいやすいかなと考えることが、私にとって日本語の良い勉強になっています。また子ども達に祖国のことを紹介できるのも嬉しいです」(クリス)

「子ども達が話しているのはとても簡単に日常的な日本語ですから、たくさんある日本語の表現のなかで、どんな表現が日常的によく使われるのか言葉のチョイスを学ぶのにもとても良い機会です。また、私は心理学的勉強をしているのですが、それに関連して単一言語の国で生まれ育った子ども達が、どのように外国語を習得していくかも興味深いです」(キヤメロン)

外国人との触れあいは 人権教育の一環にも

この試みについて稲荷小学校の坂井信博校長にもお話を伺った。

「2011年から公立小学校では『外国語活動』が5、6年生で必修になり、本校でもALTの先生が来てくださって簡単な単語や挨拶などを教えています。また、文部科学省が東京オリンピックが開催される2020年までに、これらの内容を3年生からスタートさせ、5、6年生は週3回の実施を検討していると言われています。このように

今後ますます小学校での外国語教育の重要性は増すでしょう。小学校の語学教育で大切なことは、覚えさせるのではなく、海外の人とのコミュニケーションを楽しむことで、語学への苦手意識を持たせないようにすることです。子ども達にとってこのクラブが外国語や異文化に興味を持つ一つのきっかけになると良いなと思っています。また、自分と異なる文化を持つ人と触れあいながら、違いを認め、視野を広げていくことは人権教育の一環にもなります。いろんな国の人がいるけれど、みんな自分と同じ人間なんだというのを知って、自ら壁をつくることなく多様な人と関われるようになってほしいですね。今後は学習発表会など小学校の様々なイベントにも留学生を招待して、もっといろんなかたちで交流の場を持てたらと思っています」(坂井校長)

本学では33カ国から541名(2013年度後期)の留学生が学んでおり、国際交流に関心のある日本人学生とともに様々な交流活動をおこなっている。今回のように留学生が大学を越えて地域とつながりを持つことは、より幅広く日本文化や日本人を理解する良ききっかけとなるはずだ。また、真のグローバル化をめざす日本にとって、ローカルなコミュニケーションこそ、多様な人と接し国際感覚を養うことが求められている。「国際理解クラブ」のように留学生と地域の相互にとってプラスとなるような場づくりを、今後も積極的に支援し、推進していきたい。

風を受けてめざせ、リオ・オリンピック わずか6年で国内トップレベルの選手に成長

世界でヨット競技がこう呼ばれているのをご存じだろうか。「King of Sports(キング・オブ・スポーツ)」。日本ではまだまだ競技人口は少ないが、ヨーロッパでは熱狂的ファンの多い国民的スポーツだ。特に有名なのは、英国のベン・エインスリー選手。五輪で4大会連続金メダルに輝いたことから王室よりナイトの称号を授与されており、その知名度はサッカーのベッカム選手をも凌ぐという。ヨットレースの醍醐味は、自然という予測不能な相手に、体力、頭脳、そして五感の全てを駆使して挑むところにある。ルー

まるというものだ。一見シンプルだが、肌を風を読む繊細な感覚、波の動きを予測・分析する力、刻一刻と変化する自然の表情に対応する判断力といった様々な能力が複合的に要求される、非常に奥の深いスポーツである。

この競技の選手の多くは、幼少期にヨットを始め、風や波と共に育ち、自然との付き合い方を体得している人が多い。しかし、本学ヨット部の瀬川和正選手は、大学からヨットを始めた異色の選手。にもかかわらず、2013年8月には世界選手権の日本代表に選出される。2016年のリオデジャネイロ五輪出場をめざし、ナショナルチームの練習にも参加する、ニッポン期待の星だ。



ヨット部
せがわ かずまさ
瀬川 和正さん
経済学部現代経済学科
浪速高等学校出身

始めるまで、ルールも知らなかった

幼い頃から競泳やトライアスロンの全国大会に出場する選手として活躍していたという瀬川選手。周囲には本気でオリンピックをめざす友達も珍しくなかったという。中学・高校時代はサッカーに熱中したものの、大学に入学して改めてオリンピックを意識する。

「自分の人生をどう生きたいのかと考えたら、やっぱり辿り着きたい目標はオリンピックだと思いました。そこで、大学から始めても日本一になれる競技を探していたところ、目に入ったのがヨット部。それまでヨットなんて見たこともなければ、ルールも知らなかったんですけど(笑)」

日本一になるぞと、期待に胸を膨らませて飛び込んだ龍大ヨット部。スポーツ推薦の枠があった頃は全国的に活躍していた選手もいて、全日本インカレ団体戦入賞や優勝をめざしていたが、入部したときはあまり実績のないチームだった。また、指導してくださるコーチも仕事の合間を縫って来られるため、瀬川選手はほぼ独学でヨットを学び始める。周囲の環境に頼らず、「自分の道は自分でつくる」というのが瀬川選手スタイルのようだ。1、2年時はなかなか大会でも上位に入ることができなかったが、3年生のときにインカレ個人予選で7位。入賞は逃したものの、初めてジュニアからの経験者にも勝てるんじゃないかという手応えを感じた。その1年後、近畿北陸学

生ヨット選手権大会個人戦4位に入賞し、全日本インカレの出場を果たすも、団体戦は3位まで全国大会に進出できたが4位という結果に終わる。自分がチームの足を引っ張ってボロ負けしてしまった。そんな状態でもヨットを続けるか、一時は悩んだというしかし、どうしてもオリンピックを諦められない瀬川選手は、競技種目を変更して世界をめざす決意をする。

レーザー級で、世界を狙え!

一般に大学でおこなわれるヨット種目はスナイプ級と470級という二人一組でおこなう競技だが、瀬川選手は4年生から一人乗りのレーザー級へ転向。この種目は、ヨットをできるだけ多くの人に普及させようという目的のもとにつくられたもので、舟は艇体はもとより、マスト、セイルなど全ての仕様が世界共通の均一化したものを使用すること。自動車レースのようにマシンを調整する異なり、誰もが艇の性能ではなく『腕前』で勝負できる種目だ。

「スナイプ級や470級は技術と経験が求められるので、やはりジュニアから始めた人は強いですね。一方、レーザー級はオリンピックのヨット種目のなかでは最も体力が求められるといわれるもので、シンプルながらあるし体格も大きいので、シンプルなのに種目にかけてみようと思いました。また、レーザー級のヨットは費用の面でもコンパクトです。470級のヨットは300万円以上

レーザー級は60万円くらい。とはいっても僕は今持っている2艇とももらい物でやっているの、お金がかかっています(笑)。また470級の舟はセイルが3枚もあり、遠征するにはトレーラーやトラックで引っ張らないとダメですが、僕の舟は自分の車に乗せてどこにでもいけるので便利なんですよ」

そんなレーザー級の特徴は、自分のペースで黙々と練習をする瀬川選手の志向に合致した。そして種目を変更して1年も経たずして、初めての海外遠征の機会を得る。2013年11月、世界選手権オマーン大会にナショナルチームのメンバーとともに出場したのだ。

「この大会では自分がヨットとはこういうものだ、と思っていた概念が覆されましたね。僕の常識を超えた奇想天外なタクティクス(戦略)を使って、しかもめっちゃめちゃ早い人が山ほどいる。目からウロコ、世界は広いなあと思ひ知りました。結果は119/126位と惨憺たるものでしたが、視野が広がった貴重な経験でした。常識にとらわれず、いろんなことを試していかなきゃ、と思いましたね」

可能性は誰よりもある! リオ、東京をめざして

昨年4月、日本セーリング連盟のオリンピック強化委員会は、2016年リオ五輪に向けて新体制を発表。リオ五輪では『3種目の入賞と1種目のメダル獲得』との目標を掲げた。ロンドン五輪ではメダルレース

への進出がならず、各種目で惨敗。ましてレーザー級では国枠さえ取れなかった。というわけで、瀬川選手はレーザー級選手に下された至上命令は、なんとしても国枠を確保することだ。そこで日本のヨット選手全体のレベルの底上げをめざして、今まで各自で練習をおこなっていた選手達がみんな集まって練習することになった。瀬川選手も昨年10月から練習場所を琵琶湖から和歌山のナショナル・トレーニングセンターに移し、日本トップレベルの実力を持つコーチについて練習を始めている。

「リオですっかりと結果を残して、東京につなげたいですね。僕の強み、それは可能性は誰よりもあることです。僕はまだヨットを始めて6年。レーザー級を始めてまだ2年しか経っていません。ジュニアの頃からやっている選手なら、少し成績が悪くなるとうやめた方がいいんじゃないかなって落ち込むんですけど、僕の場合、まだまだ未知数ですからね(笑)。最近コーチとの練習を始めたことで新たな発見も多く、まだまだ伸びている自分を感じています」

自分の可能性を信じて、ひたすら上をめざす瀬川選手。卒業後はこれまで以上の練習環境を求めて活動を続けていく。初めてヨットに乗って以来、わずか6年で世界レベルまで成長した瀬川選手。リオ五輪、東京五輪までには、さらに大きくレベルアップした姿を見せてくれるに違いない。今までヨットに関心がなかった方も、これを機に注目してみたいかが。

41回 バトントワリング 全国大会



EL DORADO

たった7人でめざした、黄金郷 バトントワリングで、念願の全国大会に出場

バトン・チア SPIRITS
写真左より
井上 あずきさん、石神 華子さん、藤原 彩乃さん、藪 綾美さん、田中弘美さん、藤川 明絵さん、上林 眞奈さん

大学行事や体育局サークルの試合の盛り上げ役として欠かせない存在、バトン・チア SPIRITS。いつも光り輝く笑顔でキャンパスを照らしてくれる彼女達であるが、舞台裏での素顔は日々ハードな練習をこなすスリートだ。彼女達の毎日は多忙である。日々の練習だけでなく、授業と練習の合間を縫って他の部の応援に駆けつける。応援は要請があれば関西地区だけでなく遠方にも出かけ1日で複数競技を掛け持ちすることもあるそう。また、競技会にも出場しているため、常に技術向上のための練習も欠かせない。

小さなミスも許されない！小編成チーム

はじめにチームバトンを少し紹介しよう。メンバーは1年生から4年生まで7名。全員が幼い頃からバトンに親しむ経験者で、中高時代に何度も全国大会へ出場した経験を持つメンバーもいるなど、実力者揃いだ。しかし、他大学のチームは20名以上いるところがほとんどというから、7名というのはかなり少ない。人数によるデメリットなどはないのだろうか。主将の藤原さんにお話を伺った。

う。この悔しさをバネに、彼女達はまた新たな練習の日々をスタートする。

メンバーから二言

主将 藤原彩乃さん

「幼い頃、私の人見知りをなおそつと両親にバトンクラブに入れられたことがバトンを始めたきっかけ。今も人見知りは変わりませんがバトンを持つているときだけは明るくて自信に溢れた自分になります。大会の結果はくやしいですが、後輩達が来年リベンジしてくれるはず！期待しています」

井上あずきさん

「みんなでがんばった4年間は私の誇りです。中学からバトンをしている私にとって、バトンのない人生は考えられません。卒業後は指導員をめざして資格を取得し、バトンの楽しさと可能性をたくさんの子ども達に伝えていきたいと思っています」

藤川明絵さん

「私は大会直前に足を骨折してしまっ、正常時と同じだけの実力が出し切れなかったことが残念でした。それでもこの7人で全国大会の舞台に立てたことがとても嬉しかったです。後輩たちには、このくやしさをバネに来年がんばってほしいですね」

石神華子さん

「私は中学からバトンをやっていて全国大会に

「人数が少ないということは、それだけ一人ひとりの演技が目立つということです。たとえばAKB48のように人数がたくさんいれば、ひとりが少し遅れたり、間違えたりしてもあまり観客には気がつかれませんよね。そういう意味では、より揃った完璧な演技が求められるところが厳しい点です。でも逆に、一人ひとりがしっかりと自分をアピールできれば、より強い印象を持たせることもできるんですよ。今回の大会にむけて、みんなでそのことを意識しながら練習に取り組んできました。一人ひとりの責任の重さは20人いるチームとは比にならないですから、みんな自分の役割を意識して真剣にバトンに取り組んでいます。そんな意識の高さとメンバーのまとまりの良さがこのチームの持ち味です」(藤原さん)

黄金郷をめざして、心をひとつに！

今年取り組んできた演目は『EL DORADO』。黄金郷を探し求める旅人の苦難と、辿り着いた喜びをバトンとダンスで表現するプログラムだ。激しい振りつけで観客を魅了するこの演目は、藤原さんでさえ「4年間で一番ハードだった」というほど。練習時でも3分30秒の曲を通して踊ると、みな疲労のあまり床に倒れ込むありさまだったという。

「コーチに指導していただいて、体の使い方から見直し鍛えたことで、技術力ではカバーできないしなやかさ、表現力が身についたと思います。衣装も自分達で二晩かけて手づくりし、メイクもプロの方が主催する講習会へ参加して、舞台映えるメイク方法に挑戦

したんですよ」(藤原さん)
努力の成果はさつそく形になってあらわれた。2013年の「関西バトン・チアコンテスト」で17年連続グランプリを受賞しただけでなく、「バトントワリング関西大会」でも金賞受賞と快進撃を重ね、かねてよりの目標であった「バトントワリング全国大会」に初めて出場することが叶ったのだ。

そうして臨んだ「第41回バトントワリング全国大会」は、12月7日に幕張メッセでおこなわれた。大学生の部は全国から選ばれた3大学が金・銀・銅3つの評価を競い合う高校時代に3回も全国大会の舞台を踏んだ経験のある4年生の井上あずきさんです。幕が開くまでの間、緊張で手が震えたという。

「全国大会の会場には独特の雰囲気があります。久々にあの雰囲気の中に身を置いたとき、やつとここまで来たんだ、という思いがこみ上げてきました。この大会を目標に日々厳しい練習にみんな耐えてきたことを思うと、感激と緊張で涙が出そうになりました」(井上さん)

そして7人は舞台に咲いた。つらく厳しい練習を乗り越え、ただひたすらに輝く場所をめざしたこの1年。そこには自分達にとってのEL DORADO、黄金郷を探し求める物語があった。そんな日々を胸に鮮やかに魅らせながら、仲間と心を一つにあわせて踊りきった3分半であった。結果は金賞には一步及ばず、銀賞。しかし、全国大会に確かな足跡を残した記念すべき一歩だ。泣いても笑っても、同じ青春の1ページ。やりきった気持ちさえあれば、そのページは永遠に心のなかで輝き続けるのだろ

も出たことがあるのですが、今回は緊張のあまり手に汗をかいてバトンを落としてしまいました。みんなに申し訳なくて、改めて金賞を取る難しさを実感しました。来年は推薦入学で優秀な後輩が入ってくることも決まっているので、新たなメンバーで絶対に金賞を取りたいと思います」

田中弘美さん

「結果はくやしけれど、今ある全力は出し切れたと思います。龍大はまとまりのよさでは一般部門(社会人チーム)にも引けを取らないはず。今までやってきたことを精一杯出し切って来年こそ金賞が取れるようにチームをサポートしていきたいです」

藪綾美さん

国際化学部3年 一条高等学校出身

「SPIRITSは大学の応援だけでなく、企業の授賞式や市議会の祝賀会などに呼ばれたり、京都パープルサンガの試合前に踊るなど、様々な活動をおこなっています。そんな中で普段ではできない経験ができています。そんな中で、大学ではもうバトンはするまい、と思っていたのですが、やっぱり続けてよかったです」

上林眞奈さん

国際化学部1年 大阪芸芸高等学校出身

「全国大会の出場を果たしたメンバーに入ることができてとてもうれしいです。今回はくやしい結果となりましたが、来年は必ず金賞を取りたいと思います。1年生ということでも先輩方に頼りっぱなしでしたが、4月に入学する1年生達を引っ張り、今年のチームに負けなくらい良いチームにしていきたいです」

法学部 中島琢磨准教授が「第67回毎日出版文化賞」、「第35回サントリー学芸賞」を受賞



法学部 中島琢磨准教授の著書『沖縄返還と日米安保体制』が、第67回毎日出版文化賞（人文・社会部門）と、第35回サントリー学芸賞（政治・経済部門）を受賞した。

毎日出版文化賞は、優れた出版物の著编者、出版社などを顕彰する伝統ある賞（1947年創設）。またサントリー学芸賞は、独創的で優れた研究者を表彰する、非常に栄誉ある賞（1979年創設）である。

<中島琢磨准教授のコメント>

この度は、栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。今後ともご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

推薦入学者（専願）対象の入学準備サポートプログラムを実施



本学では昨年度から、推薦入学試験（専願）合格者対象に、「入学準備サポートプログラム」を実施している。これは、有意義な大学生活の送り方を体感してもらうとともに、入学後の学修意欲の向上、大学入学への不安解消を目的としている。

今年度は、12月24日（火）、25日（水）の2日間にわたり、深草キャンパス、瀬田キャンパスにおいて実施。835名の入学試験合格者と、100名を超える先輩学生が進行役（ファシリテータ）として参加した。

参加者からは、入学準備サポートプログラムに参加して満足したとの声が多く寄せられ、またファシリテータにとっても、本プログラムでの活動が有意義な2日間となった。

龍谷メルシー株式会社がキャンパスライフ充実のサポート



昨年2月に本学の100%出資で設立した「龍谷メルシー株式会社」は、学生のキャンパスライフ充実のために、様々な事業を展開している。同社は、主に本学の間接業務を担っているが、キャンパス内に自動販売機を増設したほか、学生達から人気の高いシューズメーカー「crocs™」のファミリーセールを開催するなど、学生生活充実の後押しをしている。ほかにも就職活動の証明写真や卒業式の貸衣装の手配、住宅斡旋などにも取り組んでいる。こうした事業から得た利潤は、本学の教育研究の充実を目的として、同社から本学へ寄付された。

龍谷ソーラーパークの竣工式を挙行



本事業は、本学の研究成果をもとに考案した再生エネルギー事業の普及と、事業収益を地域貢献活動の支援を目的とした「地域貢献型メガソーラー事業」である。本学が社会的責任投資（SRI：Socially Responsible Investment）をおこなうとともに、関係機関それぞれの資源やノウハウなどを供給するかたちで連携する全国初の取り組みである。

印南町での竣工式には、日裏勝己氏（印南町長）、後藤政治氏（株式会社京セラソーラーコーポレーション代表取締役社長）、深尾昌峰氏（株式会社 PLUS SOCIAL 代表取締役）のご出席のもと、式典及び除幕式を実施した。また式典の様子を本学深草キャンパスへライブ中継し、式典終了後には深草キャンパスの施設前でもテープカットをおこなった。

和歌山県印南町に設置した、全国初の地域貢献型メガソーラー発電所「龍谷ソーラーパーク」（株式会社京セラソーラーコーポレーション、株式会社 PLUS SOCIAL 及びトランスバリュー信託株式会社連携）の竣工式を、2013年11月5日（火）に開催した。

龍谷ソーラーパークは、和歌山県印南町と龍谷大学深草キャンパスに設置され、合計で約1,850kW（発電量：年間約1,900,000kWh）発電する大型太陽光発電施設である。（2013年11月下旬より全施設が稼働）

「龍谷大学おにぎり開発委員会」が琵琶湖固有種のホンモロコを使用したおにぎりを開発



分達学生が何かできないかと、食文化を研究テーマにしていた米田直樹さん（国際文化学部2年生）がメンバーを募り、学生4名による「龍谷大学おにぎり開発委員会」を発足。以降、ホンモロコを具材としたおにぎりの販売に向けて活動をスタートした。

現在、商品販売先への提案に向けてサンプルを試作しており、2013年11月8日（金）には試食会も開催した。将来的にはコンビニで販売し、若い人に、「もっとホンモロコを身近なものに感じてほしい」という目標を持っている。

今回の試食会以外にも、本学学生や、滋賀県のホンモロコ養殖業者や企業、商品企画に携わっている方々へ試食サンプルを配布。消費者側・生産者側の声を聞き、商品企画内容をさらに検討し、販売実現に向けて継続して活動をおこなう予定である。

なお本取り組みは、2013年度「龍谷チャレンジプログラム」の一つに選ばれた学生活動でもある。

学生有志「龍谷大学おにぎり開発委員会」が琵琶湖固有種の淡水魚「ホンモロコ」を使用したおにぎりを開発した。

琵琶湖固有種のホンモロコは、古くから琵琶湖の名物として珍重されてきたが、知名度低迷や養殖業の担い手不足により、出荷数が減少するなどの課題に直面している。この課題に対して、自

「龍谷チャレンジプログラム」とは、学生らしい自由な発想で、特色ある活動を志している自主活動団体に対して大学が資金面をサポートし、学生の主体的な活動を応援するものである。

理工学部の学生・教員が各種学会賞などを受賞



理工学部の学生・教職員が各学会の主催する講演会や論文発表などにおいて、多くの受賞者を輩出した。今後の活躍が期待される。

<受賞内容>

公益社団法人日本金属学会第153回秋期講演大会 優秀ポスター賞
受賞者 森本 悠平さん (大学院理工学研究科機械システム工学専攻修士1年生)

日本化学会有機結晶部会第22回有機結晶シンポジウム 最優秀講演賞
受賞者 藤永 典子さん (大学院理工学研究科物質化学専攻修士1年生)

日本知能情報ファジィ学会 貢献賞

受賞者 三好 力 教授 (理工学部情報メディア学科)

ネイチャー・インダストリー・アワード〜若手研究者からの発信〜

日刊工業新聞社賞

受賞者 永瀬 純也 助教 (理工学部機械システム工学科)

ICBME2013 Young Investigator Award

受賞者 田原 大輔 講師 (理工学部機械システム工学科)

※国際会議「The 15th International Conference on Biomedical Engineering」

理工学部 近藤倫生准教授が JST 戦略的創造研究推進事業 チーム型研究 (CREST) に新規採択



理工学部環境ソリューション工学科 近藤倫生准教授の研究が、独立行政法人科学技術振興機構 (JST) の戦略的創造研究推進事業におけるチーム型研究 (CREST) 研究領域「海洋生物多様性及び生態系の保全・再生に資する基盤技術の創出」に新規採択された。

戦略的創造研究推進事業とは、国の政策目標実現に向けて目的基礎研究をトップダウン型に推進する科学技術振興機構 (JST) の事業で、産業や社会に役立つ技術シーズの創出を目的としている。

近藤准教授はこれまでに、生態系に多様な生物種間関係が存在することが、自然のバランスを保つ鍵であることを、世界で初めて突き止めるなどの研究成果をおさめてきた。その内容が米国科学誌「Science」(2012年7月20日発行)に掲載されたほか、平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞を受賞するなど、その研究活動が注目を集めている。

研究課題 / 「環境DNA分析に基づく魚類群集の定量モニタリングと生態系評価手法の開発」

研究代表者 / 近藤倫生 准教授 (理工学部環境ソリューション工学科)

研究体制 / 龍谷大学・京都大学・神戸大学・千葉県立中央博物館

研究期間 / 2013年10月1日〜2019年3月31日

研究費総額 / 233,800,000円 (予定)

経営学部 三谷ゼミ「証券ゼミナール大会」にて優秀賞受賞



2013年12月13日(金)、14日(土)の2日間にわたって開催された「2013年度証券ゼミナール大会」(主催:全日本証券研究学生連盟、協力:日本証券業協会)において、経営学部・三谷ゼミが、昨年度に引き続き、通算3回目となる優秀賞を受賞した。

「証券ゼミナール大会」とは、金融・証券を学んでいる全国の大学のゼミの学生が、所定のテーマについて事前に論文を交換し、大会の場で討論するもの。今大会では31大学から53ゼミ・研究会の775名が参加しておこなわれた。

短期大学部が国連アカデミック・インパクトに参加



根本国連広報センター所長と赤松学長

短期大学部は、2013年10月に国連アカデミック・インパクトに参加した。国連アカデミック・インパクト (UN Academic Impact) は、国連広報局 (DPI) のアウトリーチ部が担当するプログラム。国連と世界の大学などを結ぶ新しいパートナーシップであり、定められた10原則を支持し促進させるというコミットメントによって成り立っている。

なかでも短期大学部では、これまでの貧困問題に関する教育・研究などの実績や今後の教学展開の方向性などとの関係から、主に「原則6:人々の国際市民としての意識を高める」、「原則8:貧困問題に取り組む」、「原則10:異文化間の対話や相互理解を促進し、不寛容を取り除く」に取り組むことにしている。

2013年度は「公的扶助論」の開講、「特別講座(海外研修)」の開講準備、国際福祉コースの開設準備、フィリピンの実地研修などに関する研修会の開催に取り組んでいる。

理工学部 遊鷹正秀教授がソチ・オリンピックに審判員として派遣



理工学部環境ソリューション工学科の遊鷹正秀教授が、ソチオリンピックにショートトラックの審判員として派遣された。

2009年にオリンピック審判に必要な国際スケート連盟 (ISU) のレフェリー資格を取得し、今回初めてオリンピックの審判員をつとめた。

2014年2月13日 女子500m 準々決勝開始時の、審判紹介のシーン 右手をあげているのが遊鷹教授

地域の課題を市民が考える「福知山100人ミーティング」を開催



2013年9月6日(金)から8日(日)の3日間にわたり、成美大学及び福知山市と共同で「未来を描く福知山100人ミーティング」を開催した。この取り組みは、政策決定のプロセスに一般市民が参画するための仕組づくりを、市民・自治体・大学が共同で実施するというもの。平成24年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業で採択された、「地域資格制度による組織的な大学地域連携の構築と教育の現代化」への取り組みの一環である。

京都府福知山市にある成美大学のキャンパスで実施され、無作為抽出により応募・選出した10～70歳代の、幅広い年齢層の市民100人が3日間にわかれて参加。5人1組単位のグループで討議をおこない、福知山のまちづくりをテーマとした多様な議題について深く討論を交わした。話し合いでは、事前研修を受けた市民協働推進委員会メンバーや本学学生をはじめとする大学生が、進行役(ファシリテータ)を務めた。

龍魂編集室が大学スポーツ新聞コンテストで優勝



大学スポーツ新聞の制作を競う「第7回大学スポーツ新聞コンテスト(報知新聞主催)」において、龍魂編集室が初優勝を果たした。本コンテストは、報知新聞の運動班、カメラ班、レイアウト班のプロが、100点満点で各大学の制作紙を評価するもの。本学は原稿部門、レイアウト部門でトップの評価を受け、特に表紙の西川選手(本学陸上競技部)の原稿は満点に近く、総合82点の評価を受けた。

龍魂編集室は、昨年のコンテストで審査員から「レイアウトに遊び心がない」などの評価を受けたことから、今年度は紙面の作り方を一新した。今後、ますますの活躍が期待される。

放送局がNHK全国大学放送コンテストで3位入賞



2013年11月23日(土)、24日(日)に開催された、第30回NHK全国大学放送コンテストの音声CM部門で、放送局が第3位に入賞を果たした。

このコンテストは、全国の大学・短大の日頃の放送・制作活動の成果を発表する場であり、全国から応募作品が寄せられる。

今後の放送局の活躍が期待される。

東日本大震災復興支援ボランティアの活動報告 《第3回ボランティア活動》



2013年11月15日(金)から18日(月)の4日間、31人の学生が宮城県石巻市雄勝町において「おがつ店こ屋街2周年記念祭」のボランティアをおこなった。これは昨年に続いて2回目で、今回は会場のテント張り、ステージ設営、フィリピン水害の募金受付窓口、抽選会場係、みこし担ぎ、餅まきなどの運営補助をした。また、本学ブースにおいて、京都の名産品販売、喫茶コーナーでの接待、ゲームコーナーの運営、匂い袋や念珠の手作り体験などを、学生31人がシフトを組んでおこなった。

雄勝町にゆかりのあるアーティストや郷土芸能のステージを、龍谷大学の黄色のピブ姿、企業の法被姿の学生達が大いに盛り上げた。会場内のあちらこちらで、地元の方々と話し込む学生の姿があり、特に喫茶コーナーでは、茎ほうじ茶や龍谷茶「雫」、ハッ橋を出しながら、被災者一人ひとりから震災当時の話を聴くことができ、貴重な経験となった。穏やかな秋空のもとでお年寄りの話に耳を傾ける学生達の真剣な表情や、子ども達との交流で自然と出てくる笑顔は、お祭り会場全体を包み込んでいた。



テント内の本学ブースでは、京都の複数企業から提供いただいた京菓子や漬け物、和雑貨を販売。その売り上げで雄勝町特産の硯石や海産物を購入し、帰京後、物資を提供いただいた企業に学生達がお土産として持参した。そして12月3日(火)には瀬田キャンパスにて報告会『みて、聞いて、感じた雄勝の今』を実施した。

また、12月14日(土)には、福島県出身の詩人和合亮一さんを講師に迎え、「復興支援フォーラム和合亮一講演会」“福島に生きる、福島を生きる”を開催した。このフォーラムの目的は、皆で震災に向き合うこと。被災地の現状を知ること、私達にできることは何かを考え、これからも関心を持ち続けるきっかけとした。

龍谷ブランド動画制作プロジェクトによる動画が3月中旬より配信スタート



2014年3月中旬より、龍谷ブランド動画制作プロジェクトによる動画配信がスタートした。

本プロジェクトには、大学紹介や広報活動を担うアドミッション☆サポーター、龍魂編集室、学生広報スタッフに所属する学生19名が制作メンバーとして参加し、約5カ月間にわたって活動してきた。

プロジェクトメンバーは、ブランドの考え方や撮影スキルを学びながら制作をすすめてきた。本格的な動画制作が初めてという学生がほとんどだったが、チャレンジを楽しんでいる様子うかがえた。本プロジェクトで得た経験を、今後は所属するそれぞれの団体の活動で活かし情報発信力を高めていく。

動画配信先 www.ryukoku.ac.jp/brandnavi/

リアルな臓器モデルが医療界に革新を起こす

ウェトラブ株式会社

REC レンタルラボに入居するウェトラブ株式会社が開発する臓器モデルが医療界から大きな注目を集めている。

患者の負担を極力低減する低侵襲医療が主流となりつつある現在、先端的外科手術は内視鏡などを使っておこなわれることが一般的だ。それに伴って医師の技術力向上のための訓練用シミュレータの需要が年々高まっているが、多くの医療現場ではこれまでシリコンや豚の生体、こんにやく、みかんの皮などが手術トレーニング用として使用されており、その再現性については大きな課題を抱えていた。ウェトラブが開発・製造する臓器モデルは素材に人体近似性が高い親水性樹脂 PVA（ポリビニルアルコール）を用い、独自の加工技術でほぼ実際の臓器に近い感触を実現している。



肝臓モデル



疑似血管モデル

代表取締役の岡野仁夫さんは「理工学部の協力を得たことで素材の柔らかさや引っ張り強度などの物性を科学的に検証することが可能になった」と話す。「臓器や骨の形状だけを再現することは比較的容易ですが、素材的に近似させることは難易度が高い。切削感や縫合感が実物に近く、実践的な手術トレーニングに役立つリアルな訓練用シミュレータには科学的な物性評価が不可欠でした」

骨モデルと臓器モデルについては、複合材料力学を専門とする辻上哲也教授が解析と検証を担当し、バイオメカニクス（生体力学）と計算力学を専門とする田原大輔講師が実験と計算シミュレーションを駆使してウェトラブをサポートしている。

今後は、患者からのオーダーメイドでその人物の血管や頭蓋骨、頭皮などの複合的な人体組織モデルを作成して手術工程全体のシミュレーションにも対応したいと話す岡野さん。ウェトラブと龍谷大学の連携が医療界に革新を起こす日もそう遠くはなさそうだ。



ウェトラブ株式会社岡野仁夫さんと田原大輔講師、辻上哲也教授

龍谷大学の公開講座 全201講座開講

※2014年前期開講分

REC

Community College
レックコミュニティカレッジ

右側の画像：長祿合戦図屏風（部分） 長浜市長浜城歴史博物館蔵

- 仏教・宗教
- 文化・歴史
- 文学
- 自然・環境
- 心身と健康
- 現代社会
- 外国語
- 資格

詳細はパンフレット
またはホームページをご覧ください

2014年度前期パンフレット請求受付中 無料でお届けします！

● REC京都 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
● REC滋賀 〒520-2194 大津市湖田大江町橋谷1-5 <http://rec-ryukoku.jp/> TEL 077-543-7848
075-645-7892
06-6344-0284

電話受付/月曜日～土曜日（祝日を除く）10:00～16:00

アジア仏教文化研究センター

アジア諸地域の仏教についての研究を踏まえ、日本仏教のあり方を改めて捉えなおす



第2回国内シンポジウム「日本仏教に未来はあるか」



台湾仏教界の現状について報告される尼僧の方々

アジア仏教文化研究センター（BARC 2010-2014 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業拠点）では、プロジェクト4年目を迎えた今年度、発足以来3年間のアジア諸地域の仏教についての研究を踏まえ、日本仏教のあり方を改めて捉えなおすための試みをおこなってきた。特に「エインゲイジド・ブディズム（社会参加仏教）」をひとつの大きなキーワードとして、仏教が社会に果たす役割についてより一層の理解を深めるべく、シンポジウムや研究会を公開にて開催した。

2013年度第2回国内シンポジウム（7月20日開催）では、「日本仏教に未来はあるか」と題して、日本仏教の抱える課題と今後の可能性について、各宗派の現状や問題点についての報告がなされた後、宗派を超えた討論がおこなわれた。

第3回全体研究会（5月18日開催）では、「アジアで活躍する仏教指導者」として台湾から尼僧の方々をお招きし、慈善事業や教育事業での活動で注目される台湾仏教界の現状について、特にその中核を担う尼僧の役割について報告された。

これらの研究活動は、本研究センターが「仏教」という共通項のもと、アジア諸地域の歴史・思想・美術・地域研究などの学際的研究を推進しており、かつ仏教がそれぞれの国や諸地域において果たしてきた役割やその可能性の探究には、まず日本を含むアジア各国の仏教の現状の理解が必要であるとの認識に立つことから進められているものである。

これらを踏まえ、プロジェクト最終年度となる2014年度には、国内外から多彩な登壇者を迎えて、「日本仏教のゆくえーその可能性」と題した国際シンポジウムを7月5、6日の2日間にわたって開催し、今後の日本仏教の活性化につなげていくための、日本仏教への具体的な提言をおこなう。

2014年度は他にも、近代以降の日本仏教を捉えなおすための2つの国内シンポジウム「近代日本仏教と親鸞」、「仏教と死者のゆくえー近現代の日本からの展望」（5月開催予定）のほか、12月には公益財団法人仏教伝道協会との共催による、アジアの近代仏教をテーマとした国際ワークショップの開催を予定している。また「仏教とジェンダー」というこれまでほとんど光が当てられてこなかったテーマについても、日本仏教の現実としてその問題性を取り上げ、そこから今後の仏教の進むべき道をさぐっていききたい。



いままでになかった革新的な農学部創設へ向けて
ユニークな教員が続々と集結！

2015年に農学部が瀬田キャンパスに新設される。そのコンセプトは、農作物を基盤とした「食の生産」だけでなく「加工」「流通」「消費」「再生」に至る一連の流れを「食の循環」という観点から見つめ直す農学教育である。また、仏教系大学として、「食」と「農」、「人類」と「自然」の持続可能な未来を考える際の重要なキーワードと考え、他者との共存共栄の観点から価値観の転換を図る。今回の教員ナウでは、広い視野で「食」と「農」を捉えている、新しい農学部の屋台骨となる5名の教員を紹介する。

Faculty of Agriculture
農学部
2015年開設予定

※2014年5月設置認可申請予定



社会経済の仕組みから考える、食と農



食料農業システム学科
かがわ ぶんよう
香川 文庸 教授
(就任予定)

専門は、社会経済農学、農業経営学、農業統計学。京都大学大学院農学研究科博士後期課程中退。著書に『農作業料金の経済分析』(単著)、『農業経営発展の会計学』(共著)、論文に「農業経営による情報開示のインセンティブ」(単著)、「農業経営の社会的責任とアカウンタビリティ」(共著)等

仕組みを理解している人間が考えなくてはならないのです。龍谷大学農学部では、農学を単に技術の問題のみとして考えるのではなく、社会経済の問題としても考える新しいタイプの農学部です。とはいえ、そのことは本来の農学の姿に戻る原点回帰であり、それが新しく見えるだけだと私達は考えています。

将来に適した農家の形態を探る研究

現在、私が研究しているのは、農家の経営についてです。伝統的な家族経営をおこなっている農家さんがいる一方で、企業による農業生産法人も増えています。一般的にはビジネスセンスを持った株式会社が大規模に農業をした方が上手くいくだろうと言われますが、必ずしもそうではないのです。例えばお米を作るときに、水の管理で共同作業が必要なのに、効率だけで決められない、農村社会の歴史やしきたりがあります。このようなことがわかっていないとうまくいかないのです。また、生産条件が良い地域の農業なのか、悪い地域の農業なのか、条件や環境によって将来のビジョンは全く違ってきますので、多様な農家や農村の実態を調査し、地域毎の特性に見合った、より良い農業経営のかたちを考察していきたいと考えています。

正確な調査のためには

コミュニケーション力が不可欠

農村調査をする際は、現場に足をこび、生の話を聞かないと、統計だけではわからない

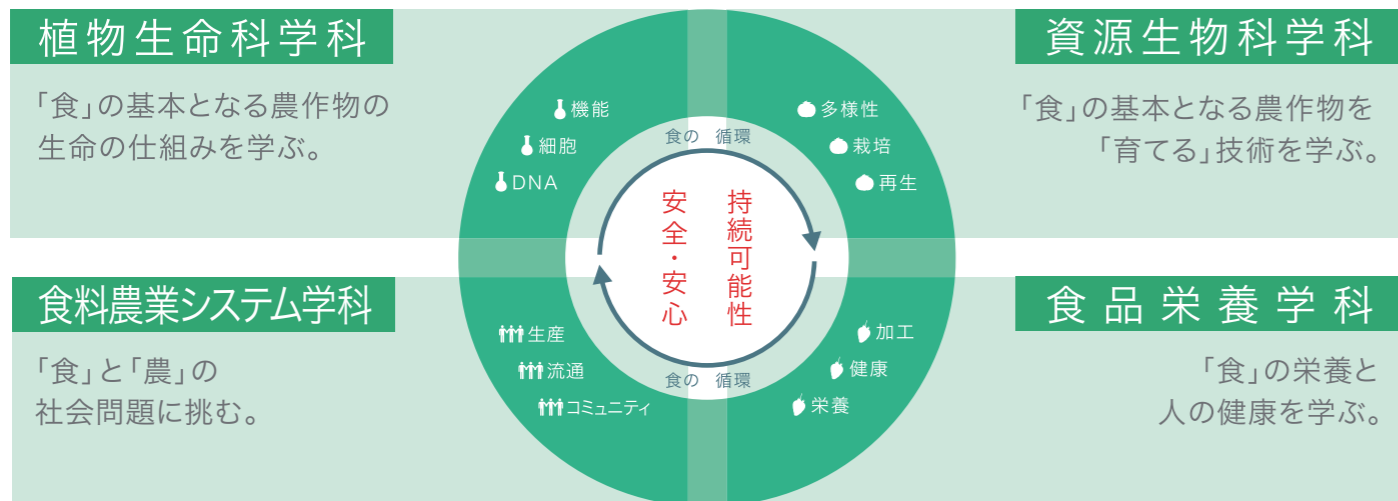
い部分があります。いまや携帯やネットの時代ですが、農家の人が実際何を考えているのか、今の農政をどのように評価しているのか、農家の人と向かって話をし、信頼関係をつくらないと、より良い調査ができないのです。研究者にも人間力が求められるということです。だからコミュニケーション能力を養うことにも重点を置き、学生が農家との交流が持てるよう、農家の方々と意見交換をしたり、調整をおこなっているところです。

社会で活躍できる農学人を育成する

一方、食への問題はローカルに考えると同時にグローバルに考えなくてはなりません。日本は食料自給率が低いから、海外から大量の食料を買っています。たくさん買ってたくさん捨てている。それをやめれば、日本が買わなかった分が貧しい国に回るかもしれないわけです。学生には他の国ともつながっているという認識をリアルティを持って理解し、そこから自分には何ができるのかを考えてほしいと思います。

卒業後、専門分野に進む学生もおりますが、大多数が一般企業に就職するでしょう。だからこそ、社会性があり、経済の仕組みを理解して、農業の技術や食の特質を知っている、バランスのとれた学生を育成することが大切だと考えています。そんな人達が社会に増えていくことによって、農業全般に対する見方も変わっていくのではないのでしょうか。

農学部学科構成・学びのイメージ



次なる

「緑の革命」をめざして



植物生命科学
ふるもと つよし
古本 強 教授
(就任予定)

専門は、基礎生物学・植物生理学。京都大学農学研究科卒業後、東京大学理学部、京大生命科学研究科、広島大学大学院理学研究科を経て現職。

植物にも五感がある？

皆さん、植物に視覚はあると思いますか。私達の視覚では色を見分けることができますが、実は植物も同じことをしています。赤い光で花を咲かせたり、青い光の方に向かおうとすることがわかっています。こういった研究分野を基礎生物学といいます。私はこの分野で、まだ誰も知らない植物に秘められた能力を発見することをめざして「植物は環境に应答するのかどうか」という研究をしています。

最近、私はある発見をしました。それは、冬の植物は夏の植物に比べて温度変化を敏感に察知する、ということ。つまり性能の良い温度センサーをもっているのです。この結果を応用して、冬の植物の遺伝子から温度を感知するセンサーを取り除いてしまえば、冬以外の別の季節にも植えることができるかもしれません。そこでベテラン百姓の義父に畑を借り、代表的な冬の植物である麦を、稲の

収穫が終わった9月頃に植えようとする。義父は「それはダメ」と言うのです。麦は気温が下がる11月になって植えないと、高温を感じてひよろひよろと伸びてしまい収量が落ちてしまう。だから昔から麦を伸ばさないように「麦踏み」までするのだと。私にとって世紀の大発見かと思われたことが、農家にとっては常識だったのです。

今こそ、フィールド起点の農学を

ノーマン・ボーローグというアメリカの農学者は、1960年代の深刻な食料危機を回避するために、小麦の茎を、短く太くなるように改良し、倒れにくい丈夫な品種をつくり、増産に成功しました。ノーベル平和賞を受賞したこの活動は、緑の革命とも言われています。いま、人口が爆発的に増加するなか、再び食料危機が訪れようとしており、世界中で第二の緑の革命を待ち望んでいます。温度感覚に注目し、成育期を伸ばすことをめざす私の研究もそうなる可能性も秘めているのです。

これからの農学が向かうべき方向は、フィールドをスタートとした研究です。今までの農学は、研究室にこもった学問でしたが、自然のなかで植物が生き抜いている現場に研究を求めれば、今まで見落としてきたことがたくさん見つかるはず。農家は麦を11月に植えるということを知っていますが、9月に植えられる麦をつくりだすことはできません。農家と協力して視野を広げながら、科学者から求められることに挑戦する。これこそが、いま求められている農学ではないでしょうか。

農学部ならではの 管理栄養士の育成をめざして



食品栄養学科
と い ゆき お
土居 幸雄 教授
(就任予定)

専門は農芸化学、食品化学。米国イリノイ大学大学院博士課程修了。京都女子大学家政学部教授を経て現職。

いのちと食べ物の距離を縮める教育

私はアメリカでタンパク質の基礎的な研究やコレステロールの代謝に関する酵素の研究などをおこない、帰国してからは、教育者として管理栄養士の育成に携わってきました。来年開設される農学部での管理栄養士養成課程では、学科の垣根を越えて、全ての学生に農場実習をしたり、学科横断型の体験学習や講義を履修します。これは全国的にも新しい試みです。資格の取得だけに重きを置くのではなく、食の循環ということをテーマに、食物をつくることから食べるところまでの一連の流れを学習する。それこそが農学部で管理栄養士を育成する大きな意義だと考えています。いま、魚は切り身の状態で泳いでいるなんて思っている子どもがいるように、私達のまわりではいのちと食べ物の距離が開いてしまっているようです。学生達には土に触れる

満足感をキーワードに、 食と気分の関係を研究



食品栄養学科
やまざき はな え
山崎 英恵 准教授
(就任予定)

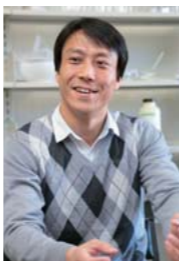
専門は、栄養化学、運動生理学。京都大学大学院農学研究科食品工学専攻博士後期課程修了。主な著作に『応用栄養学』、『だしとは何か』(共著)他。

なぜノンアルコール飲料が売れるのか

私は人の満足感というものに興味を持って様々な研究をしています。現在取り組んでいるのは、人の気分や自律神経の状態が食品や飲料の摂取によってどう変わるのかという研究です。

例えば、ここ数年でノンアルコール飲料がうなぎのぼりに売れています。なぜそんなに売れるのでしょうか。それは、この飲み物が人の気分や体の状態を変化させる作用があるからではないか。そう仮定して、心拍の変動や自律神経の動きなどを観察しています。これまで、血糖値を下げたり、体脂肪を減らすためにサポートする健康食品が販売されてきましたが、次に求められているのは気分に関与するものではないかと思うのです。楽しい気分やリラックスした気分になりたいとき、気分をスイッチしたときなんかには、人の気

東洋思想のなかで 農学を学ぶ意義とは



資源生物科学科
たま い てつしゅう
玉井 鉄宗 講師
(就任予定)

専門は、植物栄養学、土壌学。神戸大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了。生物系特定産業技術研究推進機構特別研究員。智辯学園中学・高等学校教員を経て現職。浄土真宗本願寺派 仏照山光遍寺第25代住職。

植物の謎はほとんど解明されていない

通常、農業というと「作物をつくること」だと思われるかもしれませんが、植物栄養学の研究者の焦点は、作物そのものではなく、「作物が最も生命力を発揮できる環境をつくること」です。植物にとってどんな環境が最も良い状態なのかは、長年研究されていても解明はされていないのです。

例えば、ほとんどの植物の体内には微生物が共生していますが、これが何のためにいるのかもわかっていません。植物の成長に関わっていることは間違いないのですが、さらなる研究が必要。また、私は、カリウムという植物にとって代表的な栄養分であり、最も大量に必要とされる必須元素の吸収や細胞内での濃度の制御について研究してきました。カリウムの働きは作物の収量に大きく影響を与えると考えられており、これを制御できるようになれば収量を格段に伸ばすことが可能に

持ちを誘導してくれるような食品があれば、多くの人に支持されるのではないのでしょうか。幸せな気持ちになるドリンクなんてできたら面白いですね。

多角的な視野で食を選択できる人材を

いま、食の選択肢の幅が広がり、何をどう選択して食べるかは、どう生きるのかにも関わる問題になっています。食品栄養学科では、食卓に上がるものがどのような来歴を経てきたのか、流通や加工といった二連のプロセスを学習します。そして美味いかどうか、安全かどうかだけでなく、食料自給率にとって健全なのか、グローバルにみて健全なのか、と多角的な視点で考えて、食を選ぶ人材を育成します。これからは、もつとさまざまな面で持続可能な食の在り方を考えなくてはならないのです。しかし、健全な食を持続させるためには、やはり人は心から満足していなくてはならない。地球のためだからとやせ我慢して不味いものを食べていても、結局続きませんからね。そのためにも、自国で供給できる食材を食のベースにおき、自国の料理を美味しいと感じて食べられることが食の喜びを与え続けてくれるのではないのでしょうか。その土地の伝統食を食べることは、日本の農産物の生産・消費にも大きく関係してきます。この下地を育てていくのが「食育」です。食品栄養学科は管理栄養士を養成する課程を設けていますから、広い視野をもって「食育」をおこなえる人材を社会に輩出することも大きな役目であると考えています。

なるでしょう。様々な謎が解明されて、より最適な環境が実現できれば、作物が生命力を発揮し、農業や化学肥料に頼らなくても生産性を向上させることが可能になるはず。現代の科学技術に頼りすぎている農業から脱却し、持続可能な農業を実現するために、自分もその一端を担いたいと考えています。

問題にすべきは技術の使い方

西洋思想では、自然は神が人間に与えた利用すべきものですが、仏教的な東洋思想では植物も動物も、人間と同じレベルのもです。この考え方は西洋では理解されないかもしれませんが。現代の日本では生活様式だけでなく価値観までもが西洋化したことで、農業も工業化し、効率や経済性だけで語られるつがあります。しかし、本来、農業というのはいのちを育む、食を生み出すものであり、自然の一部を我々がいただいて生きていくという意識がなくては破綻してしまうのではないのでしょうか。私は僧侶でもあり、東洋的なアプローチで農学を学ぶということに大きな意味があると考えています。

科学技術というのはよくナイフにたとえられます。料理も作れるけれども、同時に人も殺す道具にもなってしまう。要は使い手の問題です。龍谷大学農学部では、ナイフを研ぎすまし使いこなすことも大事にしながら、それ以上に使う者の人格形成に力を入れていきたいと考えています。今この時期にあえて龍大が農学部をつくるという意味も、そこにあるのではないのでしょうか。

日本の近代化を今に伝える 誇るべき歴史遺産

明治12年(1879)年2月に竣工した大宮本館は、西洋建築を模倣しようとした、明治時代初期の洋風建築を代表する建物として知られ、和洋の意匠が渾然一体となっている姿は、当時の気風をよく表している。

洋風の意匠を持つ大きな建物として、当時としてはかなりの存在感があった大宮本館。大きな玄関ポーチと連続したアーチ窓がトレードマークともなっている。外観を飾る石柱や窓には、木材に石材を繋ぎ止めた「木造石貼り工法」が施されており、当時の人々がいかに工夫を重ねて洋風建築を作り上げていたかがうかがえる。

平成4年(1992年)から約5年間にわたっておこなわれた保存修理事業に携わった京都府教育庁文化財保護課の浅井健二主査は「これだけ斬新で魅力的な建物をつくった当時の方々の心意気には敬服すること語る。」

また、和洋の意匠が混在しているが、随所に本格的な西洋建築の技法が使われている。洋風建築を止しく取り入れようとした努力と、それを支えた技量、未知のものへの冒険心など、この建物から当時の人々の大きなエネルギーを感じた。できうる限りの力を注ぎ込んで、時代の先駆けとなる洋館をつくろうとしたことがうかがえます」

大宮本館が建造された明治時代初期は、宗教界にとって苦難の時代だった。新政府が明治元年(1868年)に断行した「神仏分離令」いわゆる廃仏毀釈などの政策を受け、西本願寺は新時代に即したあり方を模索していた。宗門再編成の先頭に立っていた西本願寺第二十一世明如上人(大谷光尊)は、人材育成の重要性を感じてそれまで学寮、学林として約230年間続いていた宗門教育制度を廃し、国内各地に小教学校中教校を配して総合的近代教育をおこなう新しい学制を定めた。そして、その最高学府と定められたのが西本願寺南側の元坊官下間家跡に建てられた大教校、現在の「大宮本館」だった。

新学制を進めるにあたり、西本願寺は海外の先進的教育システムを導入するため明治5年(1872年)1月から数年間ヨーロッパ各国に人材を派遣。カリキュラムや教育方法などのノウハウを持ち帰らせることに成功した。大教校建造は、その新教育の幕開けであり、西欧文化流入のシンボルだったのだ。

建造には竣工まで約2年を要した。建造費は四万四千七百八十八円五十銭九厘六毛にのぼり、その大半は門信徒から募られた浄財が充てられたが、1円が金貨の時代に当時の民間建築としては他に類をみない莫大な規模だった。

大宮本館が昭和39年(1964年)に重要文化財の指定を受けてから今年で50年が経つ。同時代に建造された洋風建築の多くが嚴重な保護管理のもとで維持されていることに対し、大宮本館は、今も建造当初と変わらず日々学生が行き交う学びの場だ。日本の近代化を今に伝える身近な歴史遺産、大宮本館の姿は現在も私達に当時の様子を語りかけるとともに、龍谷大学から巣立った卒業生達の誇りでもある。

先の京都府文化財保護課の浅井主査は「この建物の魅力をこれからも社会へ広く発信し、その魅力を活かしながら多くの方に愛される建物として使い続けてほしい」と語った。

「効果的な測定と分析」が子ども達の意識を変える スポーツサイエンスコースの取り組み

Education, Unlimited

スポーツサイエンスコース

はせがわ ひろし
経営学部 長谷川 裕 教授

1956年京都市生まれ。筑波大学体育専門学群卒業。教育学修士(広島大学)。研究分野は健康・スポーツ科学。バイオメカニクス、スポーツ生理学、スポーツパフォーマンス分析、スポーツトレーニング科学に基づいた総合的な領域を専門としている。スポーツの世界で得た豊富な経験を活かし「現場に役立つスポーツ科学」をモットーに研究活動をおこなっている。

運動の楽しさを知る

「またタイムが上がったー！」
「よし、もうひと息！」

子ども達の歓声が体育館に響きわたる。昨年末に京都市内の小学校でおこなわれた体力測定での風景だ。

おそらく誰もが体験したであろうこの定番の学校行事は、スポーツサイエンスコースの取り組みによってかつての「記録を目的とした測定会」から「運動の楽しさを知る機会」へと変貌を遂げようとしている。

スポーツサイエンスコースは、経済学部・経営学部・法学部・政策学部の学生がともに学ぶ学部共通コースとして、スポーツを多面的に学ぶ様々なカリキュラムを展開している。なかでも「理論の実践」と「子ども達の効果的な体力向上」を目標に掲げて長谷川裕教授を中心にスタートした「運動能力分析

に依拠した子ども達の体力向上プロジェクト」の先進的な取り組みが、国や行政、教育機関などから高い注目を集めている。
このプロジェクトは、小中学校における体力測定を龍谷大学、特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会、一般社団法人スポーツパフォーマンス分析協会、京都市教育委員会、周南市教育委員会が構成されるコンソーシアムが運営し、最新のスポーツサイエンスに基づいた運動指導をおこなうというもの。これまでに全国6地域、約2000名の小学生の測定データを収集し、今年度、文部科学省(平成25年度)「地域を活用した学校丸ごと子どもの体力向上推進事業」にも採択されている。

「なぜ遅いのか」を科学する

長谷川裕教授はこのプロジェクトが誕生した背景を「ヨーロッパの運動教育やプロスポーツ界では常識になりつつある『測定結果の分析と活用』の重要性に日本でも気づき始めた結果」と説明する。

「この測定会では、子ども達の総合的な運動能力を測定し、それを最大限に伸ばすことを目的としています。例えば、従来では50メートル走のタイムを記録するだけでしたが、それでは『なぜ遅いのか』といった具体的な理由はわからないまま、『走る』ということについてあらゆる角度から詳細なデータを測定して分析することで、個々の改善点を明確にして運動指導をおこなうことができるのです」
測定会では最新の測定機器を駆使して10

まつなが けいこ
経営学部 松永 敬子 准教授

専門分野はスポーツマネジメント。スポーツを通じた地域活性化戦略などをテーマに研究を進めている。スポーツマネジメントの理論のみならず、「現場で役立つマネジメント能力の修得」を目標に、日々学生と向き合っている。

メートル走を「初速」と「最高速度」の視点から分析。1歩ごとの「ステップスピード」や「ストライド(歩幅)」「ピッチ」「接地時間」「滞空時間」など多岐にわたる項目を測定する。仮に全体のタイムが遅くてもスタートダッシュやトップスピードが優れているケースがあるためだ。

測定結果はその場で分析をおこない、それぞれの長所を活かした運動指導へフィードバックして2回目の測定に臨む。

「ほぼ全員の子どもが2回目の測定で記録を伸ばすことができています。子ども達は目に見えるかたちで自分の苦手分野を知り、またこれまで気づかなかった自分の潜在能力を意識するようになります」

「スポーツサイエンスにおける課題は、データをいかに現場で活用することができるかでした」と語る長谷川教授。かつては研究室で分析したデータが活きるまでに多くの時間を要しましたが、現在は機材の発達もあって現場ですぐに詳しい測定データを得ることができるようになった。

「結果が出ると理屈抜きに楽しいんです。この取り組みの一番の成果は子ども達の笑顔だと思います」

運動の楽しさを体感してもらいたい

特色ある測定・分析手法に加えて、このプロジェクトの特徴的な点がもう一つある。測定会の運営にスポーツマネジメントの専門家として松永敬子准教授が関わり、「運動を好きになるための空間」づくりにも配慮しているのだ。

「測定会では子ども達のモチベーションをいかに高く維持できるかを考えました。このプロジェクトは運動に消極的な子どもへの動機付けも重要な目的としています。測定前のアップ時や待ち時間などを活用してコミュニケーション・ゲームなどをおこない、子ども達を飽きさせない仕組みづくりをおこなっています。社会的な意義も大切ですが、現場では子ども達が楽しまないと良い結果にもつながりませんから」

測定会では子ども達に運動への意識調査もおこなっており、松永准教授は今後そのデータ分析とフィードバックを通じて、若年層の運動への意識向上もはかっています。
測定会ではスポーツサイエンスコースの学生も運営スタッフとして参加。松永ゼミの斉藤祐樹さんは、「子ども達には、小中学校の先生方よりも目線が近い僕達が寄り添うことで運動の楽しさを知ってもらう機会になったと思います。それが私自身にとっても得難い経験でした」

長谷川ゼミから測定会に参加した山下慧さんは「小中学生に測定ルールやその効果をわかりやすく伝えることを心掛けました。運動が苦手な子をほかの子どもが誘って参加してくれていたのが印象的でした。最初はつまらなさそうにしていた子ども記録が伸びると目が輝くんですよ」と話す。

斉藤さん、山下さんともにスポーツ関係への進路が決定している。この測定会で得た経験と知識がこれからのスポーツ教育を変え、原動力となるのは間違いない。

※ 文部科学省「地域を活用した学校丸ごと子どもの体力向上推進事業」：地域の各機関と連携したコンソーシアムを設置し、地域の様々な人的資源を活用した子ども達の体力向上の取り組みを実施することを目的として、2013年度より開始した委託事業。本プロジェクトで設置されたコンソーシアムの代表を龍谷大学が務めている。

“レジ打ち”で日本を元気にする社長の、
超ポジティブ・シンキング

かなど大切なことを学べました。それは今も僕の経営のベースにあると思います。それに時代は1989年。ベルリンの壁崩壊、ソ連崩壊、天安門事件と立て続けに世界情勢が変わるなかで、手紙のやりとりをした中国人が天安門で亡くなったりして、世界で大変なことが起こっていると身近に感じるわけです。今まで自分のことしか考えていなかったけれど、それでいいんだろうか、なんて考えたりして。そんなきっかけをたくさんもらった大学時代でしたね。僕は龍大に行っていなければ100%、起業してないと思います」。

人は変わる、と信じること

“人は何かのきっかけで変わる”。身をもって経験したことが、いま社長として、多くの社員を育成する際に役立っているという伏見社長。「サービス業に就く人の多くは、机に向かうより人に接する方が好きというタイプ。僕ももともとそういうタイプの人間なので気持ちはよくわかるんですよ。でも例えば勉強は苦手という子に Excel の表計算なんかをちょっと教えると、すごいスピードでマスターしちゃったりします。要はきっかけがなかっただけなんですよね。また当社の部長は40歳のときに週3回のレジ打ちパートとして入社した主婦です。彼女もリーダーの役割をやってみたら、ものすごいマネジメント能力を発揮したわけですよ。中小企業には優秀な人材が来ないなんて言われがちですけど、それなら育てればいい。人が成長する“きっかけ”をどれだけつくれるかで、中小企業の未来は決まるのではないのでしょうか」

そんな伏見社長が、会社をつくって一番良かったと思うとき、それは「会社や僕との出会いによって社員が変わる姿を見られたとき」だという。超ポジティブな伏見社長の本当にすごいところは、人も状況もありのままに受け入れ、「この人は変わる」、「事態は好転する」とまっすぐに信じる強さを持っておられるところかもしれない。たくさんの可能性を開きながら成長する、チェッカーサポートのこれからが楽しみだ。

株式会社チェッカーサポート 代表取締役社長

ふし み けい し
伏見 啓史さん

神戸市出身。文学部英語英米文学科1993年卒業。業務請負会社の営業、広告代理店での営業を経て、流通小売業向けの人材派遣事業を立ち上げる。その事業をもとに、2002年に株式会社チェッカーサポートを設立。現在、大阪・名古屋・浜松・福岡に営業所を構え、全国200店以上のスーパー・百貨店のレジ業務を請け負う。



ぼり旗や、チラシを作る日々…。大学を卒業して10年は“人生ゲーム”を地で行くような、予測もしない展開ばかり。

「それでも、あまり落ち込んだりはしなかったですね。僕は20代は勉強期間だ、とわりきることにしたんです。すると逆境にあえばあうほど、“おっ!これは鍛えられるチャンスじゃん”と思えてくる。その考え方は今も同じです。だから僕は悩むということがないんですよ。とにかく与えられた環境でベストを尽くしていれば、次にチャンスが来たときにつかめる力がついてはいるはずだから」

そんな伏見社長にもついに大きなチャンスがやってくる。しかし、チャンスはチャンス顔つきをしてやってきたわけではなかった。不本意だった広告営業にもいつしかやりがいを見つけ、課長にも昇進。この商売で生きていこうと決めた矢先のことだった。またしても本社の鶴の一声で業務変更。流通業界向けの人材派遣サービスを企画しろ、という。“3回断ったほど嫌だった”というこの業務も、やるからにはと本気で取り組んだ。それが今のチェッカーサポートの原型となる。

「夢や目標のとおり成功する人って本当に偉いと思うけど、計画とおりにはいかない人や、そもそも目標がないっていう人の方が圧倒的に多いですね。でもそこで、ネガティブになってしまったら負のスパイラルに陥ってしまいます。“今の状況でかまばつても良くなるとは思えないんです”なんていう若い人によく会いますが、やりきってもいない段階から結果を悲観したり、自分や社会をジャッジしすぎなんじゃないかな。そうではなく、とにかく与えられた環境でまずは一生懸命やってみること。そうすれば、やらない人に比べたら絶対に前進しているはずですよ」

大学時代があるから今がある

そうは言っても、それは起業するくらいの優秀な人の話でしょ。と斜めから見ってしまう人も多いのだが、伏見社長の場合、どうもそうではないらしい。「僕はね、大学に入るまでは本当にチャラチャラしたでしょうもないやつだったんですよ。高校時代の成績は学年で436人中の435位。猛勉強してなんとか龍大に入ったクチです。そんな僕を変えてくれたのが、海外交流委員会なんです」

“外国人の彼女ができるかも”という不純な誘い文句につられて、軽い気持ちで入った海外交流委員会。入学して早々、ろくに大学に行っていなかった自分と比べると、他のメンバー達はみな優等生に見えた。「せ、世界が違う」と活動に参加しづらくなり、もうこのまま辞めてもいいやと思っていた矢先、なぜか突然、委員長から交流バスツアーの企画を一手に任される。ほとんど顔を出さない彼を心配してのことだったのだろう。

「まんまとその先輩の策略にはまってしまったんですよ。それからはむしろ授業にもバイトにも行かないくらい、委員会活動にのめり込んでいきました。しかも委員長にまでなったんです。それまで人の上にたつ役割なんてしたことない、というか、むしろアイツにだけはやらせちゃだめだ、っていうポジションだったのに(笑)。先輩のくれたきっかけで僕は人生が変わりました。また、当時の委員会ってものすごく堅苦しい組織だったのですが、おかげで組織とは何なのか、どう動かすの

もし、あなたが近所のスーパーや百貨店で、他の列よりもスピーディーに進むレジを見かけたら。もし、レジのスタッフの思いもよらぬ笑顔やていねいな接客に気分が良くなったりしたら、そのレジを担当しているのはチェッカーサポート社のスタッフかもしれない。

チェッカーサポートは、「レジ部門に特化した人材のアウトソーシング」というユニークなビジネスを展開する会社である。同社のサービスの特徴は、徹底した“笑顔”の接客だ。「毎日買い物に行く場所こそ、笑顔のおもてなしが必要」との考えから、所属する3500名のスタッフは全員、「目の細め方」「口角の上げ方」など詳細な笑顔の研修を受けてから現場に立つ。スタッフのほとんどは主婦や学生だが、みなレジ打ちの仕方からコンプライアンスまで、きちんと教育された「レジ打ちのプロ」だ。レジの接客品質の向上という盲点をついたこのサービスは、人材不足に悩む小売業界で高く評価され、瞬く間に脚光を浴びた。このチェッカーサポートを起業されたのが、本学OBの伏見啓史さんである。

底抜けに、ポジティブ

「死ぬ以外は何も怖くないです。たとえ一文無しになって路上生活することになっても、“俺が一番空さ缶拾ったる!”とか言ってそう(笑)。状況を楽しむのが得意なんですよ」

ニコニコと和やかな表情で軽快に取材に答えてくださる伏見社長を拝見していて、失礼ながら思わず聞いてしまった。「社長、不安で眠れなかったり、悩むこととかありますか」。その答えがこれだ。すかさず隣に控える広報の女性に「僕が落ち込んでるとこ、みたことある?」と聞かれると、広報の方も「ありません」と即答。このポジティブさ、一体どこからくるのか。

起業して7年で年商70億を超えたというチェッカーサポート。伏見社長曰く、まさに“ウハウハ”な滑り出しだった。会社は様々な賞を受賞、社長にもマスコミの取材が殺到した。しかし、良い時期は続かない。2010年、リーマンショックの煽りをもろに受ける。会社の売り上げは2割ずつ落ち、2年で年商43億まで下がったという。しかし、そんななかでも社長は「絶対何とかなると思っていたので、わりと平常心でした。逆にリーマンショックを経験したことで社員のみならず自分も強くなったし、僕も落ち着いたし(笑)。よかったかも」と、けろつとしている。3年目からは再び右肩上がりに転換。来年は60億を超える予測だという。

起業までは予想外の連続

しかし、ポジティブな人ほど意外と陰で苦労している人が多いものだ。伏見社長も、人生の滑り出しは全く好調ではなかったという。聞けば悲惨な出来事のオンパレード。大学卒業後に就職予定だったIT企業は業績が悪化し、内定を取り消される。7カ月間ガソリンスタンドでのバイト生活。地元で働けばどこでもいいやと入社した、製造現場の業務請負会社はわずか1年で買収される。本社命令で東京へ異動。なぜかグループ会社の広告代理店の営業に。「CMとか作るのかな」と期待した異動先で待っていたのは、スーパーの「大売り出し」のの

「私が男だったら惚れちゃう!」「あんな彼女に肉焼いてほしい!」「夏美ちゃんの破壊力ヤバすぎる」。などとネットでいま話題の焼肉チェーン「牛角」のCM。そのなかで、彼氏とお肉を食べる天然キャラの彼女役を演じているのが夏美さんだ。彼に話しかけるキュートな演技に男女問わずメロメロになる人が続出。一気に知名度が上がった。大阪から東京へ活動場所を移して2年。新人モデルの登竜門である“三愛水着イメージガール”やファッション雑誌『JJ』のモデルをつとめ、昨年からはテレビにも積極的に進出。山崎製パン『ランチパック』のCMでも剛力綾芽さんと共演するなど、モデルからマルチなタレントへと着々と成長している。芸能界に入りたい、と願う女性は星の数ほどいるなかで、順調にチャンスをつかんできた夏美さんの魅力とは。東京・青山の所属事務所でお話を伺った。

子どもの頃からの夢

幼い頃からテレビ画面のなかでキラキラと輝く女性に憧れて、家で一人大声で歌ったり、好きな歌手のダンスを真似て踊ったりしていたという夏美さん。そんな彼女が芸能界への道を歩み始めたのは、大学3年のときだ。ミスキャンパスに選ばれたことをきっかけに、関西でモデル活動をスタート。事務所に頼らず自分で積極的にオーディションをまわり、日本最大のファッションショーである神戸コレクションなどに出演。華やかな活動の一方で、きちんと学校にも通う学生だった。学生生活では留学生と交流したいと、チューターを申し出たり、ダンスサークルに入ったり。とにかく興味のあることに片っ端からチャレンジしたという。

「大学時代で印象に残っているのは、1年生のときに必須だった宗教の授業です。それまで仏教についてほとんど知らなかったのですが、お寺にお参りに行くのは、自分の願望のためだと思っていたんですけど、感謝するものなんだ!って知り驚きました。それ以来、お参りしたときには“いつもありがとうございます”って思うようになりました」

ダウンタウン浜ちゃんお墨付きの運の良さ

充実した大学生活4年間を過ごし、卒業後は迷わず上京の道を選んだ夏美さん。芸能界をめざして上京、というと、苦勞の多い下積み時代の始まり、のようなイメージがあるが、夏美さんの場合はどうやら全然違うようだ。「東京にきて悩んだこと、うーん、ないですね。わりとすぐに大きなオーディションに受かって、初めに立てた目標が次々に実現したんです。なかでもずっと出たかった『ダウンタウンDX』(読売テレビ)に出演できたのは嬉しかったですね。本番前に浜田雅功さんの楽屋にご挨拶に伺ったのですが、感激のあまり自己紹介しながら泣いてしまったくらい(笑)。そのとき、たまたま本番前なのに時間があって、ずいぶんいろいろとお話したり、お仕事のアドバイスもたくさんいただけました。浜田さんも『本番前にこんなに時間あったの初めてや。自分、相当運ええで』と仰ってました。私、昔から運が強いんですよ!」運とは引き寄せるもの。お話を伺うなかで、夏美さんの強運の仕組みがうつつらとわかってきた。

あたって砕けろ!自信と度胸

毎年、年初に目標を立てるといふ夏美さん。今までその目標を達成できなかったことはないそうだ。そうやって乗り越えてきたことがまた自信につながるという。

「“自信だけはすごいよね”っていつもマネージャーに言われます。オーディションを受けた後いつも、“絶対受かってる”って言ってるので(笑)。もちろん落ちるときもあるけれど、絶対いける!っていう自信はいつもあります。本気で願うことで叶わないことはないって強く思っているんです。それに昔からあたって砕けろタイプ。オーディションでも、私はいつもその場で思ったことをそのまま伝えるだけ。緊張したりもしないので、“度胸があるね”って言われますね」

思えば、子どもの頃から挫折したことも、人間関係で悩んだこともないという。「いや、あるかもしれないけれど覚えていないだけかも(笑)。人には本当に恵まれています」と笑う夏美さん。今までの人生を妥協せず、自分に自信を持って生きてきたからこそ得られた強さなのではないだろうか。屈託のない笑顔は、太陽に向かって伸びる向日葵のように朗らかだ。しかしその根は太く、しっかりと大地に張っている。

大嫌いなランニングと大好きなお酒

そんな夏美さんも、最近になって芸能界の厳しさをじわじわと感じ始めたという。「モデルにはものすごくスタイルがよかったり、綺麗だったり。わっ!すごいな、こんな人がいるんだ。という人がゴロゴロいます。一線で活躍している人は自己管理も徹底していて、1日100回も腹筋している方もいるんですよ!」

しかし現実が見えてきて、また現実を知ることで、変に構えて自分らしくなくなるのが一番こわい、という。今後、有名になるにつれて環境はどんどん変わっていくだろう。しかし、芸能界の荒波を乗り越えるなかで“夏美らしさ”はますます輝くのではないだろうか。

最近、水着を着る機会が減ったことで、めっきり意識が緩んできたと感じた夏美さん。昨年末から奮起して始めたのは大嫌いなランニングだ。苦手な早起きをかんばん、朝1~2時間も走るという。「トレーニングをしていると、自分に自信がつくんですよ。すると、そこからオーラも出る。やっぱり努力している人は輝いているんです。本当は夜走った方が目立たないんですけど、私はお酒が大好きなので、夜はちょっと…、そこだけは譲れないんです(笑)」

仕事をしているときが一番幸せ

露出が多くなるにつれて、ファンも増えてきたが、ご本人は微笑ましいほどのんびりしているみたいだ。「牛角のCM以来、街で気がついてもらえることが増えましたね。この前、渋谷で通りすがりの女の子に“あ、夏美ちゃん”って声をかけられて、思わず振り返ってしまっただけになりました(笑)。でもすごく嬉しかったですけどね」

そんな天然なコメントに、ブレイクしても変わらずに今の夏美さんのままでいてほしいなあ、と淡い思いを抱いてしまうのは、すっかり夏美ワールドにとりこまれてしまったのかもしれない。



ミス龍大、CMガールに抜擢! 運と度胸で突き進むタレントへの道

タレント・モデル

なつみ

夏美さん

本名：斎藤夏美。大阪市生まれ。2009年文学部英語英米文学科卒業。2008年度のミス龍谷大学に選ばれる。在学中よりモデルとして神戸コレクションなどに出演、2012年より上京し、本格的に芸能活動を開始。ファッション雑誌『JJ』、2013三愛水着イメージガールなどを経てCMやバラエティ番組にも出演。現在ヤクルトスワローズ公認サポーターもつとめるなど、タレントとして活動の幅を広げている。

驚異の日本記録、432ヤード！ マイペースな『日本一の飛ばし屋』の挑戦



プロゴルファー

みなみ きみ ひろ

南出 仁寛さん

大阪市生まれ。1997年経済学部卒業。

父は漫才師のオール巨人さん。

2006年にドラコン選手権にて、403ヤードの日本記録を樹立。

翌年、大手ゴルフメーカー・キャロウェイゴルフと契約しプロに転向。

現在 432 ヤードの日本記録保持者であり、

日本人として最多 6 回のドラコン世界大会に出場している。

一方、「走るように打つ」という独自の『スプリントスウィング理論』を提唱、

PGA ティーチングプロとして、後進や一般の方へのレッスンも積極的におこなっている。



ゴルフ好きの皆さん、ドラコンという競技をご存じだろうか。ドライビング・コンテストの略で2分45秒と決められた時間に、ドライバーで6発のボールを打ち、一番遠くまでボールを飛ばした人が勝者となる競技だ。日本国内ではまだまだ認知度は低いが、世界的には非常に人気の高いスポーツである。そんなドラコンで、432ヤードという驚異の日本記録を持ち、6回も日本チャンピオンに輝いた、名実ともに「日本一の飛ばし屋」が、本学ゴルフ部出身の南出仁寛さんだ。一度はツアープロを断念、タレント活動をしながらも、ドラコンと出会い、プロの座を手にした南出さん。これまで歩んでこられた道のりと、ドラコンの魅力について伺った。

ゴルフを始めたのは高校から

小学校・中学校と野球をやっていたのですが、高校に入るときに親父（漫才師のオール巨人氏）から「ゴルフでもやってみたらどうや

とアドバイスされたのがきっかけ。たぶん親父は僕と一緒にラウンドがしたかったんでしょうね（笑）。そこでゴルフ部の強い大阪桐蔭高校に入学。キャプテンになってインターハイ、日本ジュニアにも出場しました。でもプロになろうなんてことは、当時は考えていませんでしたね。大学に進学したのは推薦だったのですが、僕の実力では1部リーグのレギュラーにはなれないだろうな、と思っていた。2部リーグの大学に入って1部に上がる方が面白いだろうと考えて、候補にあがったのが龍谷大学でした。勉学の方はね、ひどかったですよ〜。入ったときは正直卒業するつもりもなかったんです。2年生が終わった時点で90単位くらい足りなくて。一度は諦めかけたんですけど、3年も4年もフルで単位を取ってサマーセッションに通って、なんとか卒業しました。

龍大ゴルフ部時代に全国大会へ出場

大学のときは、そんなにゴルフは真剣にやっていなかったんです。みんなもうまくなかったので練習しなくてもレギュラーになれてしまう。それで甘えてしまったんですね。練習も週1回だけで。それでも3年のときにキャプテンをやって2部から1部に上がり、1部の全国大会にも行くことができました。でも、あのときもうちよつと一生懸命やってあげれば良かったなと思います。当時の龍大のゴルフ部は規則がやたらと厳しくて、部活のとき以外も学校ではジーパン禁止。襟つきのシャツ、スラックスでないとダメ。それは僕がキャプテンになって廃止しました（笑）。当時のメンバーとは今でも会いますよ。昨年12月にも広島でゴルフコンペをしたんですが、みんなめっちゃヘタになってました（笑）。それはそれで楽しいんですけどね。

日本記録はタレント活動の成果？！

卒業後は、親父に1年間だけ留学させてくれと頼んで、オーストラリアのゴルフ学校に入りました。ちなみに、今でもそのときの借金を返しています。行くとき「帰国して3年間だけプロをめざすから、それでダメなら諦める。惜しくても、うちよつとやってみるだけとは言わんといてくれ」という約束をしてから行ったんです。3年やってプロになれなかったら、たとえその先なれたとしても稼げないと思ったからです。結局、プロ昇格試験は3回受けて3回とも落ちてしまい、26歳できっぱりとゴルフはやめました。それから吉本興業に入って、2年くらいタレントとして活動していました。当時フジテレビがやっていた『海筋肉王〜バイキング〜』という肉体に自信のある選手が様々な難関に挑戦していくという番組に出たんですけど、そこでも、全然活躍できないから少ししか映らないんです。それでもっと映りたい、と思ってめっちゃ筋トレをはじめたんですよ。親父に家の2階からロープをたらしてもらって、それをよじ上ったり（笑）。変な親子ですよ。そうしたらその成果が出たのか、番組で1位になれたんです。そんなときです。友達から「ドラコン」の大会に出てみないかと誘われたのは。

もともと野球部だったので飛ばすのは得意なほう。それに筋トレの効果もあって、初めての大会で310ヤード飛んだんです。それで、もう1回だけ出ると言って2回目に403ヤード、日本記録が出てしまったんです。人生ってわからないもんです。その後キャロウェイゴルフと契約してプロに転向しました。その後も408、412、415、417、

432と自分で日本記録を塗り替えていきました。

5球は必ずして最後に入れる！

ツアープロにはなれなかった僕がドラコンでプロになれたのは、短気な性格がこの競技に合っていたからかもしれません。ゴルフは18ホールどんなに早く回っても5時間かかるじゃないですか。それで17番までいい調子できて、最後に失敗したら腹立つでしょ。でもドラコンだったら2分45秒で終わり。負けても次の日にははげろつとしています。僕は身長178cm。腕が長い方が有利なドラコンでは、日本人でも190cm以上の選手がいるので決して大きな方ではありません。ですから、パワーやスピードではなく、技で勝つタイプです。ドラコン大会はフェアウェイ・キープが原則なので、400ヤード飛ばしてもその先の幅40ヤードのなかにボールを止めなくてはファウルです。だからむやみに飛ばせばいいわけではなく、コントロールや、風を読む力、そしてグラウンドのどこか硬くてどこか軟らかいのかも知っていないとほならない。技術と経験も重要なんです。しかも一発勝負ではなく、ずっと勝ち上がっていかないとダメなんですよ。単純ですけど深い競技です。僕は5発は必ずして最後の1発で逆転、というパターンが多いんです。5球は必ずしもプレッシャーはあまり感じませんね。負けても死なへんし、って開き直ります。逆境に強いというわけでもなくて、マイペースなんですよ。追い込まれないとやらないタイプなんです。大学の単位と一緒にすわ（笑）。

練習は週に1回だけ

僕、練習は週に1回100球ちょっとしか打たないんです。仲間には「そんなんで日本記録出るわけないやろ」なんて言われるんですが。ほかのドラコン選手は毎日練習するみたいなんですけど、このあたりもマイペースですね。36歳っていったらもういい歳ですからね。体があまり強くないので、すぐ痛めるんですよ。でも、歳を重ねていくほど精度も距離も上がっています。ほかの人からは「そんなに何回も日本チャンピオンになってたら燃え尽きるやろ」、とも言われるんですけど、そうでもないですよ。でも一度やめようかなと思ったことはあるんです。今まで4回チャンピオンになった人がいるので、5回勝ったらやめよつて。でも5回目のチャンピオンになったときに、後輩達に「南出さんやめたら誰を目標にすればいいんですか」と止めてくれたんです。「じゃあ、うちよつとやるか」と。でも去年もチャンピオンになってしまいましたから、逆に後輩達に「おまえら、なにしとんねん」って怒っておきました（笑）。

世界大会をめざして、挑戦は続く

去年初めて世界大会で10位に入ったんです。それまでの日本人のベスト記録は64位だったので、だいぶ更新しました。今の目標は世界大会でベスト8、決勝に残ることです。といってもはじめからベスト8をめざしていたのでは無理やろうから、気持ちとしてはベスト4をめざしていきます。自分はどこまでいけるのか、挑戦することが僕にとってのやりがいなんです。ドラコンはシニアもあるので45歳までがんばって、その後は自分で編み出した『スプリントスウィング理論』を広め、たくさんの方の指導もおこなっていきたいと思っています。



「空白の時代」を知るヒントは身近にある
古代史の魅力伝える2冊



平林 今後、挑戦してみたい研究テーマはありますか？

水谷 いつか古事記と日本書紀の成立について研究をしたいと思っています。いずれも古代史を考える上では外すことができない第一級の史料ですからね。

平林 私は天皇家の祖神、天照大神ですね。太陽神信仰は日本だけではなく海外でも多く見られます。それがどのようにして誕生し、日本に伝えたのかを解き明かしてみたいと考えています。

水谷 私達は研究者であり教育者ですから、今後は若い学生達にもっと古代史の魅力を伝えていかなくちゃいけませんね。

平林 奈良や京都は地名や地形などに古代の名残があり、古代史を学ぶには恵まれた土地です。とくに龍谷大学は古代史研究の歴史が長く史料なども豊富です。若い方々にもっと古代史への関心を持ってもらうために、これからもその面白さを伝え続けていきたいですね。

■平林章仁・ひらはやしあきひと
博士(文学)、龍谷大学文学部教授1948年奈良県生まれ。龍谷大学文学部史学科国史学専攻卒業。

■水谷千秋・みずたにちあき
博士(文学)、堺女子短期大学准教授、1962年滋賀県生まれ。龍谷大学文学部史学科国史学専攻卒業。著書に『謎の豪族 蘇我氏』『継体天皇と朝鮮半島の謎』などに文春新書 など。

平林 5世紀後半にそれまで権力の中心にいた葛城氏の力が落ち、天皇家が本格的に実権を握るようになりました。その理由には葛城氏が主導していた中国との外交問題の失敗があったのではないかと思います。まだ律令国家形成の方向性も芽生えてなく、権力や社会が流動的なこの時代はとてもダイナミックに変化に富んでいますね。

水谷 葛城氏と蘇我氏は武内宿禰という同じルーツを持った豪族で、その栄枯盛衰にも共通点が多い。平林先生の著書にはとても刺激を受けました。

平林 私達の恩師である日野昭先生(龍谷大学名誉教授2011年に逝去)は蘇我氏研究の第一人者でした。日野先生には研究者としての姿勢などとても多くのことを学ばせていただきました。

水谷 毎月開かれる日野先生の輪読会には平林先生と一緒に欠かさず参加させていただきましたね。

平林 学生時代を思い出します。大宮キャンパスはいつまでも風景が変わらないから嬉しいですね。

水谷 古代史研究に憧れて入学した当時のことが懐かしいですね。「文学部史学科国史学専攻」という響きだけでもうれしかったなあ。

平林 水谷先生が古代史に関心を持ったのはいつ頃ですか？

ともに龍谷大学で古代史を学んだ平林章仁氏と水谷千秋氏は今最も精力的に活動している古代史の研究者である。両氏がかつて研鑽を積んだ大宮キャンパスでそれぞれの著書から古代史の魅力を語り合った。

平林 水谷先生は古代の豪族である蘇我氏をテーマに著書を出版されていますね。蘇我氏が活躍した6世紀頃はどんな時代だったのでしょうか。

水谷 大陸との交流が盛んになり、仏教による国づくりが本格化する時期です。古代における文明化の時代だと言えますね。蘇我氏は大化改新で滅ぼされたことから「逆賊」というイメージが定着していますが、仏教伝来を推進するなど古代の国家や先進文化の形成に大きな役割を果たした側面もあります。そういったことを広く知ってもらいたくて本を執筆しました。

平林 私はその少し前の5世紀頃に権勢を誇った葛城氏についての研究をおこなっていますが、この時代については今もはつきりしない点が多いんです。中学校や高校の教科書などでもほとんどふれられていないため一般的にもあまり知られていないですよ。

水谷 葛城氏は今だに謎が多い豪族ですね。天皇家を凌ぐほどの力を持ちながらもなぜ衰退したのでしょうか。

◆「龍谷」出版情報◆

【児童養護施設児の日常とハルカ】 著者 森田喜治（文学部教授）
施設で暮らす子ども達、彼らをささぐえる職員、そして施設という環境そのものの、特殊性と問題点を明らかにする。
2013年12月刊／232頁／創元社／2415円

【中院通勝の研究】 著者 日下幸男（文学部教授）
細川幽斎に師事し、のちに堂上歌壇を牽引、古典学の発展に多大なる影響を与えた中院通勝（也足軒素然）の総体を捉える。
2013年10月刊／528頁／勉誠出版／12600円

【教学シンポジウム親鸞聖人の世界Namo Amida Butsu、世界に響くお念仏】 著者 高野洋明（文学部教授）（部分執筆）
2011年教学シンポジウムの記録。世界13カ国の念仏者の生の声を収録。真宗国際伝道を窺い知ることが出来る。カラーで資料も豊富。
2013年9月刊／174頁／本願寺出版社／10500円

【月々のこぼれ】 著者（部分執筆） 高野洋明（文学部教授）
浄土真宗教団連合の発刊「法語カレンダー」。その月々の法語をもとに仏の心を味わう書籍。法語のころを繰り返し味わうことができる。
2013年9月刊／148頁／本願寺出版社／735円

【創設期の厚生経済学と福祉国家】 小峯敦（経済学部教授）編者
マシヤルからのケンブリッジ学派、ラスキンなどによるオックスフォード学派の両面から、創設期の福祉国家の理念を探る試み。
2013年8月刊／372頁／ミネルヴァ書房／8400円

【種から種へつなぐ】 西川芳昭（経済学部教授）編者
各地で多様な思いを込めて「食べ物の生産に不可欠な投入物である種の生産（種採り）」を続けている農家や団体の物語を、当事者自身の言葉で紡いだ。
2013年11月刊／257頁／創森社／1890円

【Culture and Conflict - Changing the World for the Better - 文化衝突—多文化共生のため—】 著者 李洙任（Lee Sooin）（経営学部教授）
グローバル時代に必要不可欠なコンフリクト対応力を理解するための基礎概念を、多文化共生を切り口に書き下ろした英語リーディング教材 Hidden Cultures and Differences - Identifying Cultures, Stereotypes and the Other Cultural Communication のアプレックスを網羅している。
2013年11月刊／90頁／松柏社／1995円

【「新書」から学ぶ公務員の教養力】 三宅正伸（経営学部非常勤講師）著者
市民が真に求めている公務員は、役所のために働く人ではなく、知識を駆使したところの教養力によって、市民の活動を支援できる公務員である。
2013年12月刊／234頁／晃洋書房／10500円

【保険法 Maps 判例編】 今川嘉文（法学部教授）編者
各種保険の基本判例から最新判例を、原則2頁でまとめ、図表を用いて理解までのアクセスタイムを短縮。裁判実務から保険法の学習に役立つ好評図書。
2013年9月刊／126頁／民法法研究会／1365円

【憲法「改正」の論点—憲法原理から問い直す—】 奥野恒久（政策学部教授）共著者、寺川史朗（法学部教授）・濱口晶子（准教授）・石塚武志（専任講師）・上田勝美（名誉教授）分担執筆
改憲論がまたしても活発化するなか、その主たる論点と改憲動向を概観したうえで、それらを憲法の基本原理から批判的に検討した。
2014年1月刊／176頁／法律文化社／1995円

【地域公共人材をつくる—まちづくりを担う人たち—】 井上芳恵（政策学部准教授）共著
地域社会の問題発見・課題解決力やコーディネート力を備えた人材育成のためのアイデアと実践例、そして応用へのヒントが詰まった一冊。
2013年12月刊／192頁／法律文化社／2520円

【Faulkner and Morrison】 松岡信哉（政策学部准教授）共著
同名のカンファレンスをもとに編纂された共著。アメリカの作家フォークナーとモリソンに関する、アメリカ、フランス、中国、日本、台湾などの研究者による論考のアンソロジー。
2013年秋刊／307頁／Southeast Missouri State University Press / \$95

【社会福祉支援の「コミュニケーション」】 山辺朗子（社会学部教授）編者
ソーシャルワーク、ケアワークなど社会福祉支援に必要なコミュニケーションの要素や技法を体系的にまとめた。
2013年11月刊／147頁／あいら出版／1785円

【子どものニーズをみつめる児童養護施設のおゆみくつば園のジエネラリスト・ソーシャルワークに基づく支援】 山辺朗子（社会学部教授）編者
暴力を否定し、子どもの主体的権利を擁護し、民主主義を基盤とした話し合いを重視し、ジエネラリスト・ソーシャルワークに基づく支援を展開する児童養護施設の全体像。
2013年12月刊／289頁／ミネルヴァ書房／3150円

【こぼれと表現力を育む 児童文化】 生駒幸子（短期大学准教授）編者・著者
保育士・幼稚園教諭養成の関連科目「児童文化」のテキストとして、こどもの「こぼれと表現力を育む」視座から児童文化の理論と実践を論じた。
2013年12月刊／209頁／萌文書林／2100円

【消費者法と民法】 中田邦博（法科大学院教授）共編者
消費者法のバイオニアであった長尾治助先生の追悼論文集。第一線の研究者と実務家が執筆。
2013年7月刊／355頁／法律文化社／9030円

【ヨーロッパ私法の原則・定義・モデル準則 共通参照草案(DCFR)】 中田邦博（法科大学院教授）共編者
民法典改正へのうねりを世界的なレベルで創り出す注目の文献の翻訳。
2013年11月刊／501頁／法律文化社／8925円

【基本講義 消費者法】 中田邦博（法科大学院教授）共編者
消費者法の基礎から応用までを理解するための学習用教科書。第一線の研究者と実務家が執筆。
2013年9月刊／329頁／日本評論社／2730円

【消費者契約法改正への論点整理】 中田邦博（法科大学院教授）共著
消費者委員会の作業チームの報告書を中心にまとめられた問題提起の書。
2013年10月刊／424頁／信山社／3360円

【実践民事執行法・民事保全法（第2版）】 平野哲郎（法科大学院教授）著者
民事執行法・民事保全法の基本的な理解と実務的な問題解決能力を同時に修得できる学習・試験・実務に対応可能な教科書の第2版。
2013年9月刊／544頁／日本評論社／3990円

◆共同研究活動◆

龍谷大学人間・科学・宗教 オープンリサーチ・センター研究叢書

『東アジア思想における死生観と超越』 林 智康（文学部教授）・井上 善幸（法学部准教授）・北岑 大至（非常勤講師）共編著



死生観・死生学とは、死が根本にあって生を考えると規定され、近年注目されている学問領域である。死を覚悟して、いかに生きるかを死のところまで窮めて考える学問である。東アジア思想—大乘仏典思想（華嚴経・浄土三部経）、中国思想（儒教・道教）、浄土教思想、妙好人の思想を通して、「死生観と超越」を研究した論考。

2013年12月刊 380頁 方丈堂出版 3990円

龍谷大学仏教文化研究叢書29

『日本仏教史における神仏習合の周辺』 赤松 徹真（文学部教授）編



本書は、2008年から2010年にかけて仏教文化研究所「常設研究」に採択された「日本仏教史における神仏習合の研究」に取り組んだ研究員の成果をとりまとめたものである。古代から近代に至る神仏の関係性を造像や文献史料の分析を通して、その歴史的展開と変遷、仏教の多様性とその社会的定着を明らかにしようとしたものである。研究員は、歴史における仏教の立場形成の課題を実践的に問う問題意識を共有し、研究を推進した。

2012年3月刊 192頁 永田文昌堂 6615円

龍谷大学仏教文化研究叢書30

『大乘莊嚴経論 第XVII章の和訳と注解—供養・師事・無量とくに悲無量—』 能仁 正顕（文学部教授）編



無著・世親が説いた、インド大乘仏教を代表する宗教哲学書。同章は、仏への供養、恩師への師事、慈悲喜捨の四無量心を主題とし、智慧と慈悲を双輪とする仏教を実践的側面から体系的に説き明かした数少ないテキストである。本書は、その梵本を現代語訳して思想の解説を試みる。梵和対訳、巻末には蔵漢二訳を付し、仏教文献を原典から読むという人にも便宜を図った。

2013年3月刊／385頁／自照社出版／5460円

◆みんなの本棚◆

『正しい考え方 正思维』 山崎 龍明（1966年文学部卒業／大学教授／東京都）著者



仏教伝道協会刊行の一日一訓カレンダーの解説書。31の珠玉の名言を日常のわかりやすい言葉で、やさしく丁寧に説き明かす。

2013年11月刊／176頁／公益財団法人仏教伝道協会／210円

『詩集 奇妙な商売』 井口 幻太郎（1970年文学部卒業／三木市教育委員／兵庫県）著者



播州三木の田舎町からの一風変わった便り。住人達の営む「履歴書」に書けない商売を営むその人達との交流を通し、作者を含めた庶民の生きざま、哀歓を詠う。

2013年8月刊／130頁／蜘蛛出版社／1575円

『詩集 半跏思惟』 苗村 吉昭（1990年経済学部卒業／詩人・大阪文学学校講師／滋賀県）著者



龍谷奨励賞や数々の詩集賞を受賞してきた著者の最新詩集。半跏思惟像を巡る詩群を中心に、思惟する力により新たな現代詩の世界を切り開く意欲作。

2013年10月刊／125頁／編集工房ノア／2310円

『the sneaker's review Vol.1 "Basketball Signature Models"』



安井 邦仁（2005年経営学部卒業）著者
2013年パリファッションウィークでデビューを果たしたファッションブランド "Black Ships" が発表するマニアのためのスニーカー本。

2013年10月刊／148頁／株式会社 Black Ships / 3465円

龍谷大学善本叢書31

『中世歌書集』 大取 一馬（文学部教授）責任編集



本書は龍谷大学図書館所蔵写字台文庫旧蔵本の中、中世和歌に関する貴重書5点を影印し、解説を付して公刊したものである。ここに収録した写本は弧本ないし古写本として貴重本と認められる善本である。その収録書目と解説執筆者は以下のとおり。愚見抄（酒井茂幸）・光蘭百首（吉田唯）・詞字注（小田剛）・自讃歌注付百人一首（安井重雄）・九代抄（近藤美奈子）。

2013年5月刊 638頁 思文閣出版 13300円

大学紛争の最中、バリケードで卒業式をボイコットしようとするなか、深草学舎の教室で簡素な卒業式をして40余年。退職して時間ができたので、広報誌をゆっくり読んだところ、こんなにも充実した内容だったのかと感銘しました。卒業生として誇りに思います。

(1972年卒業生U)



この春、私の勤務する会社へ龍谷大学出身の新入社員が入社することになりました。とてもうれしく思っています。

(1985年卒業生I)



娘が龍谷大学に入学して、あと少して4年が過ぎようとしています。あつという間の4年間でした。大学生になれば学校とのつながりも無くなるだろうと思いましたが、この広報誌のおかげで、大学とのつながり、娘とのつながりを感じることができました。とても感謝しています。

(在学生保護者T)



昨年、娘が経営学部に入りました。私自身が学生生活を送りたかった憧れの地・京都。広報誌を読み、アウン・サン・スー・チー氏が来訪していたと知り、びっくりしています。

(在学生保護者I)



他の大学の広報誌も送付されてくるが、あまりおもしろい内容ではない。この広報誌は内容に大学の本気度を感じる。すばらしい。

(在学生保護者E)

●お便り待っています。

「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。また、「龍谷人」「専門家に聞く」などへの推薦や情報をお寄せください。いずれも以下のあて先まで。

《プレゼント・お便りのあて先》

龍谷大学 学長室 (広報)

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話：075 (645) 7882

FAX：075 (645) 8692

E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

編集委員 新井 潤、安西 将也、生駒 幸子、石橋 良太、太田 由記子、岡本 健資、奥田 望、梶脇 裕二、カルロス マリア レイナルース、木田 知生、佐竹 康輔、芝原 正記、竹村 光世、谷村 知佐子、中尾 覚、乗金 悟、西倉 一喜、藤原 直仁、増田 省三、南 照宣、遊鷹 正秀(50音順)

事務局 増田 滋彦/田中 秀樹/田中 正徳

広報誌「龍谷」77号

2014年3月10日発行

編集：龍谷大学編集委員会

制作：龍谷大学学長室 (広報)

発行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075(642)1111 (代表)

龍谷大学ホームページURL

http://www.ryukoku.ac.jp

龍谷 2014 No.77

広報誌「龍谷」からプレゼント！

龍谷ミュージアムペア招待券……………10組20名様



ご希望の方は、はがきにご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号(龍谷大学関係者は卒業年度・学部なども)及び広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。あて先は左記「プレゼント」係まで。

締め切りは5月31日(土)必着。

応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

広報誌『龍谷』77号 読者アンケートのお願い

今後のよりよい広報誌づくりのため、同封のアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。

なお、アンケートは、<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>からも回答していただけます。



新学部長が決まりました

学生との協働でつくりあげる学部の気風・空気を大切にしたい



経済学部長
こせ はじめ
小瀬 一 教授
任期：2014.4.1～2016.3.31

1991年に経済学部に着任。教務主任、評議員、学部長などを歴任しました。専門は中国経済史、とくに近代中国の貿易が研究課題です。

学生時代に教職課程の授業を受けた際に「時にかがんでも相手と目線の高さを合わせるよう」教えられました。しかし、実際には学生の皆さんの背丈は、私などよりずっと高い。ここは梯子に登ってでも目線を合わせて発想し、学部の教育を充実させていきたいと思えます。ところで、「経済学部は一味ちがうんだ。」これは私が着任時に諸先輩方から言われた言葉で、今も印象に残っております。あわせて学部が先鞭をつけたことも数々紹介されました。それに一歩を加えるべく、学修活動を学生が自己評価する仕組みを今年度から新しく取り入れられます。そして学生との協働でつくりあげる学部の気風・空気を大切にしたいと思います。

「法学部のグランド・デザイン」を再考



法学部長
よしおか よしみつ
吉岡 祥充 教授
任期：2014.4.1～2016.3.31

2010年に法学部に着任しました。その後、研究主任、教務主任を務め、2014年度より法学部長の任に当たることになりました。専門は民法学で、とくに土地に関する法制度(土地所有権論、入会理論、森林法制)を研究しています。教育機関としての法学部の役割は、我々の社会や学生のあり方を見据えながら主体的に設定される必要があります。このような立場から見ると、近年、私たちを取り巻く状況は、法・政治・経済・社会・国際関係など多様な局面で大きくかつ見方によっては厳しい方向に変動しつつあり、また入学してくる学生の学力や意識についてもかつてない質的な変化が見られます。このような状況を踏まえ、いま法学部では、入学してくる学生を、社会の中で自律しうる基礎力を備え、かつ次の社会を担う市民としてどう育てていくかという観点から「法学部のグランド・デザイン」について議論を重ねています。この議論を経て設定される法学部の将来像に基づいて学部教育の内容や構成を再編し、学生の皆さんとともに語り合う教育活動を通じて、法学部が担うべき社会的教育的課題に込めたいと考えています。

留学を必修とする「グローバルスタディーズ学科」を新たに設置



国際文化学部長
ひさまつ えいじ
久松 英二 教授
任期：2014.4.1～2016.3.31

2010年4月に本学国際文化学部に着任し、2012年度に教務主任をつとめたのち、2013年3月から一年間、国外研究員としてロンドン大学に留学。専門はキリスト教神学、とくに東方キリスト教神秘思想及びそれを軸とした比較宗教学思想を中心に研究しています。この3月に帰国したばかりですが、外留中に蓄えた研究や教育に対する情熱をエネルギー源に、2015年度の深草キャンパスへの移転及び「国際学部」への改組転換に向けた学部運営の舵取りに力を注いで参ります。グローバル化が進む社会に対応すべく、「国際学部」は2学科体制となり、これまでの国際文化学科と併せて留学を必修とする「グローバルスタディーズ学科」を新たに設置し、グローバル化時代におけるコミュニケーション・リーダーの養成に取り組んで参ります。「国際文化学科」では、移転する京都の特色を活かした教学内容へ充実させる予定です。「国際学部」への改組転換を契機に、学部教育のさらなる充実化と大学全体の国際化推進のため、微力ながらつとめさせていただきます。



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY